31-524

検閲済

日本奇風俗

大町桂月序
町田柳塘序
大畑匡山著

東京 晴光館發行

明治
41 6 12
内交

序

われ旅行を好むこと久し。主として、山水の美をさぐりて、其他に及ばず。この頃になりて、山水美の外に、人事美を解しかけたり。されど、山水美は、一目して盡くすべし。人事美は、一朝一夕にしては探りうべくもあらず。げに、山水は移らず、人事は改まる。我國封建割據の久しきにつれて、到る處、奇なる風俗ありき。今や、交通の便ひらけ、教育普及するにつれて、奇なる風俗次第々々に無くなりて、一致平等の平凡なる風俗に化せむとす。之を筆にしるし置くにあらずんば、空しく堙滅せむとする也。

大畑匡山のこの書、ひろく、日本諸國の奇風俗を集めたり、歌人は居ながらにして、名所をしると云ひけるが、この書を讀めば、居ながらにして、日本國中に旅行する心地する也、否、旅行したりとて、これだけの風俗は容易に知る能はざる也、多謝す。やがて堙滅すべき奇風俗も、この書によりて、長く後世に活きむとする也。

明治四十年五月

大町桂月

序

昔名醫あり、人其の名を得たる所以を問ふ、曰く我他の術無し、老人を敬する國に至れば、老人の醫となり、小兒を愛する國に至れば、小兒の醫となり、妻妾を重んずる國に至れば、婦人の醫となり、たゞ其國人の好尚と風俗とを視て、其治するところを變ず、是を以て名を天下に得たりと、豈獨り醫のみならんや、歡風察俗は、爲政者の最も心を用うべきところにして、移風易俗は、古の聖人も難しとなす、我邦維新以來、文運駸々として、日々開明に赴くと雖も、奇風異俗の現存するもの猶多し、本篇の

著者、親しく見聞する所に從ひ、蒐輯すること多年、遂に此一卷を成す、繙きて之を讀むに、或ひは壯快喜ぶべきものあり、或ひは滑稽笑ふべきものあり、或ひは鄙陋厭ふべきものあり、されども其由來を尋ぬれば、必ず其地理歷史に原因し、且つ宗教、政治等に關聯するもの多かるべし、たゞ消閑の談資として、趣味の津々たるのみならざるなり、

明治戊申初夏

町田柳塘

日本奇風俗目次

神事

尾張國府宮の裸躰祭……一
三河熱池の「てんてこ」祭……四
陸中山內藥師の蘇民祭……六
大阪の十日戎……一〇
三河豐橋の「あか」祭……一二
美濃岐阜の美江寺祭……一三
大和蛇穴の汁掛祭……一五
近江筑摩の鍋祭……一七
武藏南部領の振袖嫁兒……二一
出雲松江の「ほーらんえんや」……二二
山城宇治の大幣神事……二五
攝津西宮の御腰や祭……二九
盤城原町の野馬追祭……三〇
阿波白鳥の輪抜け……三二
伊勢桑名の石取祭……三三
信濃別所の嶽の幟……三六
大和倭文の蛇祭……三八
紀伊上和佐の笑祭……四〇
山城伏見の御出祭……四
伊勢の丹生川祭……四

著者、親しく見聞する所に從ひ、蒐輯すること多年、遂に此一卷を成す、繙きて之を讀むに、或ひは壯快喜ぶべきものあり、或ひは滑稽笑ふべきものあり、或ひは鄙陋厭ふべきものあり、されども其由來を尋ぬれば、必ず其地理歴史に原因し、且つ宗教、政治等に關聯するもの多かるべし、たゞ消閑の談資として、趣味の津々たるのみならざるなり、

明治戊申初夏

町田柳塘

日本奇風俗目次

神事

尾張國府宮の裸躰祭……一
三河熱池の「てんてこ」祭……四
陸中山内藥師の蘇民祭……六
大阪の十日戎……一〇
三河豐橋の「あか」祭……一三
美濃、岐阜の美江寺祭……一三
大和蛇穴の汁掛祭……一五
近江筑摩の鍋祭……一七
武藏南部領の振袖嫁兒……二一
出雲松江の「ほーらんえんや」……二三
山城宇治の大幣神事……二五
攝津西宮の御腰や祭……二九
磐城原町の野馬追祭……三〇
阿波白鳥の輪抜け……三三
伊勢桑名の石取祭……三三
信濃別所の嶽の幟……三六
大和倭文の蛇祭……三八
紀伊上和佐の笑祭……四〇
山城伏見の御出祭……四〇
伊勢の丹生川祭……四二

駿河島田の大奴……四四
山城太秦の牛祭……四六
伊豆伊東の尻摘み祭……四八
東京の酉の市……四九
長門下關の先帝祭……五三
駿河由比の太鼓祭……五四
常陸岩間の惡たい祭……五五
信濃倭村の大食彦祭……五七
美濃揖斐地方の伊勢參詣……五八
播磨加古庄の亥巳籠……六三

佛事

東京の御會式……六五
東京の四萬六千日詣……六六
土佐の七ケ所詣……六七
備前西大寺の會陽……六八
伊豫東部の死人の祝日……七一
丹波地方の袖米……七三
琉球諸島の葬儀……七三
アイヌ種族の葬儀……七四

祈願

東京の寒垢離……七八
上野前橋の六算……八〇
備前兒島地方の裸體詣……八一
淡路岩屋の裸躰詣……八二

駿河浦原地方の凝揚……八三
羽前山形の厄落し……八四
志摩御座の厄落し……八五
備前瑜迦地方の厄病神攘ひ……八六
大和櫟本地方の雨乞ひ……八七
駿河三日市場の雨乞ひ……九〇
上野榛名附近の雹追ひ雷追ひ……九一

商工

東京の「べったら」市……九三
尾張一の宮の市場……九五
土佐の裸體商人……九六
羽前山形の納豆賣……九七
長門安岡の肴賣……九八
越後の縮布晒し……九九

農事

尾張熱田の花の橈……一〇一
駿河地方の鍬初め……一〇三
羽前山形地方の稼穡初め……一〇三
信濃北部地方の木棉玉……一〇四
陸奥八戸の「いぶり」……一〇五
阿波川田の「のた」打……一〇八
安藝吉田地方の田植祝……一〇九
土佐地方の稻蟲送り……一一六
磐城四ツ倉濱の火喧嘩……一一七

越前敦賀の網曳……一二八
紀伊の牛交換……一二九
丹後吉阪の狐狩……一三一

婚姻

山城梅ケ畑の擔ぎ……一三三
豐前長濱浦の拐し……一三五
加賀山中地方の「おくせん」……一三六
琉球首里那覇地方の自由結婚……一三七
安藝十二ケ浦の樽開き……一三八
磐城守山地方の茶入……一三九
山城梅ケ畑地方の白裝束……一三〇
備前岡山地方の門火と鼻つき飯……一三〇
陸前松島地方の花嫁の馬乘……一三二
磐城相馬地方の籠馬と裸踊……一三三
越後地方の嫁送り……一三四
日向地方の媒妁人と蛇目傘……一三五
琉球の婚姻行列……一三六
信濃淸內路の道櫻……一三七
相摸橘樹地方の「さうとめ〳〵」……一三八
信濃粟佐の丸裸……一三九
美濃武儀地方の擂鉢割り……一四〇
越後長岡地方の送込み……一四一
磐城地方の餅搗祝ひ……一四一
陸奥八戸の婚禮祝ひ……一四二

岩見濱田地方の石地藏……一四五
信濃上田地方の籠ぶせの祝ひ……一四六
常陸九面の「ぶんだせー」……一四七
陸前岩沼地方の茶せご……一五〇
下總三原の婿祝ひ……一五一
羽前西田川地方の若夫婦の「せつげう」……一五二

祝賀　附宴會

志摩の出產祝ひ……一五三
周防陶村の水祝ひ……一五三
攝津御影の釀造祝ひ……一五六
但馬大屋椽見の卯の當……一五八
八丈島の獻酬……一五八

婦女

京都の大原女……一六二
京都西陣のお褌……一六三
攝津神戸の婦女……一六四
尾張宇田地方の「ちやんから」……一六五
紀伊熊野の婦女……一六七
近江大津追分の前綱……一六八
淡路由良地方の女……一六九
播磨姫路の女……一七一
名古屋の藝妓と娘……一七二
紀伊和歌山の娘……一七四

豐前行橋地方の娘……一七五
對馬の嫁女……一七八
攝津稗島の女……一七九
肥後牛深の娘……一八〇
土佐の娘さん見……一八二
長門藍島の色子……一八四

飲食

名古屋の茶事……一八七
伊豫東部地方の暗がり雜炊……一八八
東丹波地方の盲食ひ……一八九
羽前山形の剝日の「とろゝ」……一九〇
若狹山田の放生會……一九一
播磨姫路の祝ひさとう餅……一九二
信濃の冬至南瓜……一九三
諸國の雜煮……一九五

遊戲

伊豫宇和島の鬪牛……一九八
隱岐の鬪牛……二〇一
陸中盛岡地方の相撲……二〇三
安藝廣島地方の「ずぼんぼ」……二〇四
薩摩串木野地方の金輪投げ……二〇五
土佐の凧揚げ……二〇六
三河豐橋地方の凧揚げ……二〇九
肥前長崎地方の凧揚げ……二一〇

下總富勢の掃除日……二一二
丹波地方の日天樣のお供……二一三
土佐の隱居の魚釣……二一四
根室の花廻り……二一四
山城京都の茸狩……二一六
越後新潟の濱行……二一九
周防秋穗浦の不知次……二一九
日向佚肥の網曳……二二一
寒國の雪滑り……二二三
北國地方の雪合戰……二二五
北國地方の玉栗……二二六
越後地方の「さい」渡り……二二七

歌舞

伊勢古市の音頭……二二九
陸奥森岡の金山踊……二三二
肥前有田地方の「まだら」……二三四
伊勢のお杉お玉……二三六
四國地方の「たゞら」講……二三八
羽前秋田地方の念佛踊……二三九
羽後酒田の大黑舞……二三九
常陸水戸附近の豐年踊……二四〇
羽後阿仁の豐年踊……二四一
京都の六齋念佛……二四二
讃岐高松の盆踊……二四三

信濃新村の盆踊……二四七
淡路内膳の火踊……二四九
紀伊薗八幡の戯瓢踊……二五〇
隠岐の「どつさり」歌……二五二
アイヌ種族の「ゆから」……二五三
琉球の祝ひ歌……二五九

正月

東京の松の内……二六三
東京新吉原の脊中合の松飾……二六四
武蔵拝島の達摩市……二六五
京都初春の釜祭……二六七
駿河東部地方の穏平竹……二六九
陸前松島の暁詣……二七〇
信濃稲荷山の「どん〳〵」焼……二七一
上野岩野谷の鳥追……二七二
越後南魚沼地方の鳥追櫓……二七三

節分

大和奈良の節分……二七五
大阪の節分……二七六
周防山口地方の節分……二七七

七夕

駿河江尻の七夕祭……二七九
羽前鶴岡の七夕祭……二八〇

節句

西丹波の菖蒲刀のお祝ひ……二八一
加賀鶴來の端午……二八三
讃岐琴平地方の馬節句……二八四

盂蘭盆

京都六道の精霊迎ひ……二八六
下總布佐の新盆……二八八
尾張多加木地方の盂蘭盆會……二八九
駿河江尻の精霊流し……二九一
羽後横手の佛送り……二九二

亥の日

阿波牟岐地方の「ゐのこ」祝ひ……二九四
備後三原の亥の子……二九八
筑後柳川地方の亥の子……三〇〇

雑俗

大和奈良の山焼……三〇二
アイヌの熊祭り……三〇三
能登邑知遊廓の針歳暮……三〇九
長門下關地方の寒施行……三一一

日本奇風俗目次終

上所レ化、曰レ風。
下所レ習、曰レ俗。
（正韻）

日本奇風俗

大畑匡山編著

神事

尾張國府宮の裸體祭

尾張國中島郡の國府宮の裸體祭といへば、近國に聞えた亂暴な祭典で、『國府宮祭りて取り德、取られ損』とは、此の地方の俚諺にまでなつて居る。祭日は陰曆正月十三日で、寒い〳〵時分に裸體祭であるから、これからが既に亂暴てある。其集まつて來る裸體坊は即ち厄年の男で、其扮裝は白木綿一反を腹卷にして犢鼻褌一つの素足で、『よいしよ、〳〵』といふ掛聲をして四方から集まつて來て、社前

を流るゝ大江川へ飛込み、水垢離を取つて社内に集まる。この群集が各自の厄を拂はうとする虫のよき儺追人て、こゝに又儺負人として諸萬人の厄を一身に背負ふとする、堪忍袋の強い男が必要てある。

其人は村内て四十二の厄年に當つた、極屈竟な男が撰拔される。隨分迷惑な話で、其男は三七日前から同社宮司の許に居て、淨火で煮炊きをしたものを喰ひ、一切の不淨を近附けず充分潔齋して、祭の前夜即ち十二白の夜社殿にて修拔を受け、同社境内にある儺負堂に入れられて一夜を明かし、翌朝屈竟な若者に擁護せられ、幾千となく集り來つた儺追人の中に這入つて行くのである。儺追の裸體坊は儺負人の堂から出て來るまては、唯だ例の『よいしよ〳〵』といふ掛聲をして、群集に揉まれながら境内を馳せ廻つて居るが、それと見るや一時にどッと儺負に近寄らうと犇く、これは儺負の手でも足でも、身體の何處へても觸るれば當年の厄を免るゝといふからてある。されば儺負人は觸られても引張られても成るべく痛くないやうにと、頭髪は勿論腋下陰部の毛まて剃て了つて居る。一つは清潔の意味でもあらうが、兎に角儺負になつた身は群集に揉み立てられ、よしや屈竟の若者に擁護せられて居やうとて、堪つたものてはない先づ生命からく〳〵である。斯くして散々群集の翫弄に逢ひ、一切の厄難を頂戴した儺負人は神前に納められ、深夜に到つて明の方に向つて放ち遣らるゝのである。或儺負の人身御供に上つた人の話に、儺負堂を出てから神前に至る迄足が一歩も地に付かず、其間夢中て宙を歩いて居たと聞いたが、蓋し實況であらう。又此押寄せて來た裸體坊は、凡そ一定の場所より外へは無暗に出ないが、之を見物せんとて來れるものが、帽子を戴き襟卷をなし或は手拭でも頬冠りして居やうものなら、直ぐ引ッたくッて多勢で之を『よいしよ〳〵』と取合ひ引合ひ揉合ひて、滅茶〳〵にする亂暴な慣例がある。『取り

『穂取られ損』の俚諺はこの邊から出て居る。厄年に當る男女の中には殊更に冠物などをして、之を取られて厄落しと云つて嬉しがる輩もある。維新前までは此裸體坊が皆一樣に抜刀を振翳したもので、怪我人の出來たと云ふこともあるが、今は嚴禁されてあるから甚しい怪我人は出來ないやうである。

三河熟池の「てんてこ」祭

三河の岡崎から四里ばかり南方に熟池といふ村がある。こゝに『てんてこ祭』とて思ひ切て馬鹿氣た祭典が行はるゝ。それは毎年陰曆一月三日のことで、祀てある神體の何であるかは土地の者も知らぬさうだ。この祭日には近鄕近在から見物人が集り中々の賑ひで、神前に供へてある白飯と大根や人參の膾を戴て食へば、如何に流行する疫癘にも罹らぬと云ひ傳へて居る。この日村の若者の裝束が見

物て、夫は皆一樣に赤の裝束に赤の手拭を冠り、後方に大根にて造りたる如何はしきものを腰部に縛りつけ、妙な工合に腰を振るのである。この異樣な裝束に奇妙な飾物を腰につけ笛と太鼓で拍子を取り『てん〳〵てれすけてん』と囃しながら、腰を前後に動かして練廻るのは實に滑稽で、如何なる佛頂面でも破顏一笑せざるを得ない。

神前の廣庭の中央には藁を山の如くに積み重ねありて、之に火を點けると若者等は各自長柄の竹箒を携へて、『でん〳〵でれすけてん』と腰振り可笑しく猛火の周圍を匝廻する。此の時幾多の老若男女は我勝ちに神前に供へてある飯、否供物を戴だかんと喚き騷ぎ、彼方此方で頗張りはじめる。其の內に炎々たる猛火も山の如き灰となると、若者等は囃し方面白く竹箒にて山の如き灰を突然に八方へはねかけるので、忽ち四界闇黑叫喚の聲、人雪崩に相和して四方に散亂する樣は、戰陣の地雷火もかくやと思ふばかりにて、粉屋の娘然た

る別嬪も忽ち印度の令孃と化し、白髪の老人も綠の黑髪と變じて若返り、其他群集の面々何れも熱帶地方の人種の如く黑き顏に眼ばかりぱちつかせ、餘程用心して遠くに避けて居た者も、鼻の穴は必ず眞黑になつて居る。夫れは〳〵實に捧腹絕倒の祭事である。

陸中山內藥師の蘇民祭

奧州の正法寺といふは陸中岩谷堂の南三里ばかりなる、江刺郡黑石村に在る古い寺で曹洞宗三本山の一だといふので、所謂所自慢の第一に數へられるのである。この正法寺と黑石町との中間にある山內藥師の祭典は、毎年陰曆正月七日午後四時に始まつて翌日午前九時に終る、普通のとは餘程趣きの違ふ面白い夜祭である。當日夜の九時頃までは絕えず近鄉近在の、二十歲前後から三十五六までの者が一村一部落或は三四人の團體を作つて、眞の洗足裸躰のまゝで數

めしく兩肱を張り、口々に「じやッさ〳〵」と叫びつゝ、小川に入り水を浴びては本堂に參詣する三十三度、其勢ひ當るべからざるが如く見受けらるゝ。

昔はなかつたさうだが近年は湯卷一纏のまゝで參詣する女も見へる。此等は大抵男子の保護を受けて來る。總て是等の男女が堂に上るには堂宇の入口の階段から椽側に、それから堂宇の限られた部分に入つて、大勢の人が湯壺で摩れ合ふやうに押分けて行つて、或裸躰男から口に二三粒の米を受取り歸り來ては水に浴びる、之が三十三回に及べば完全な裸躰參りて、夜明から始める蘇民に加はるべき資格が出來るのである。この資格は何も他の制裁を受けるわけではないが、七日間潔齋せねば不安心であるが如く、三十三回に充たねば自分の良心が許さぬのである。こゝに最も可笑しきは曉近く迄妙齡の女どもが堂宇の左右に立並ひて、絕えず同一の音曲で「揃ふた

ヨ、山内揃ふた、上に妙見、下には藥師』と聲朗かに唄ふので、何の爲かと聞て見ると、休みもせず聲も嗄れず唄ひ通した者は、他日夫だけ美音になるといふことを迷信して居るためださうだ。

扨九時頃になると長さ一間くらゐな太い薪木を、澤山積み重ねて火を焚く、すると其上に上つて居る二三人の者が、煙の中で先の口調で音頭を取る、周圍の者が之に和する、頓て火勢が熾んになれば薪木を振廻して堂に上る、これが『火焚上り』と云ふので是から人氣が荒くなり始めると云つて居る。此火が消えかゝると鐘樓から別當上りの合圖が下る、此合圖に連れて物慣れた若者等は、二十間ばかり離れて居る別當の家に集まる、別當は是等の人に對つて、直徑一寸五分長二尺位の梶の木の棒を凡そ五十本くらゐ渡す、之を受取らぬ者は別當のお上りに扈從する資格がないので、爭ふて之を受取る、鑄て別當が何か供物を勿体らしく捧げて出ると、五十人の人數

は路を挿んで兩側に分れ、中腰になつて梶の棒を振廻しつゝ警護して本堂に入る。別當が神前に跪くや、棒を振廻して大騒ぎとなる、惡くするとこの時怪我人を生ずることがある。その後一時間程經れば、尚荒い鬼子上りの合圖が鐘樓から下る。鬼子とは兩親と祖父母の健在せる當年七歳の男子で、或る強力の肩に負はれて堂に上る。別當は其兒を受取て暫時祈禱をする、祈禱が濟めば護摩を焚く、同時に布袋に包んだ物を堂内に投げる、これは即ち『蘇民將來』といふ守り本尊で、待ち構へた二百前後の裸連は、例の『じやッさ、〳〵』の句調で之を奪ひ合ふけれども、多勢のことであるから何處に實躰があるか容易に分らぬ、唯呼氣の最も濃く上るところは實物のある所だと云て居る。この場合を待てるのは鬼子上りの當時から、梁や鴨居に縋り付いて居る二三十人の奴輩で、是等は各自機を見て飛び下るのだが旨く成功するか否やは知らぬ。けれども飛び下りるとき

だけは頗る勇壯だ、併し頭を踏みつけられたりする者もある。堂内で揉合ふ事一時間半ばかり、夜の明渡る頃になれば五尺も高い椽側から眞逆さまに墜ちる。それに重なる然し怪我はない、猶揉合ひ落合ひ追駈け揉合ひて、大概午前九時には終る。其結果東に屬する者が袋の中の實體を取れば東の村落が豐作、西が取れば西が豐作だと蘇民の將來を豫知するのである。又其袋の切端の緒を一筋貫つても家内安全子孫繁榮だと云ひ傳へて居る。

大阪の十日戎

戎の社は今宮にも堀川にもあつて、平常には犬の兒すら影を見せぬ荒涼たる小祠であるが、一月十日は怪我人を出だすほどの賑ひである。九日の夜は宵戎、十一日の朝は殘り福、賣り物は箕につけた三平二福の假面、二つ結びたる大俵で、女童の片言交りに謠ふ『十

日戎』の歌は、この情景を言ひ盡して餘りありといふべしだ。『鯛は せ袋、とり鉢、錢叺、小判に金箱、立烏帽子、入れ桝財布束慰斗、笹を擔いで千烏足』とは誰が云ひ始めたのであらう、其身が一年の幸運を賴み參らす戎樣を聾戎と稱へ、正面より拜みたるばかりでは心元なしとて、わざ〳〵祠の裏手へ廻りて、とん〳〵と羽目板を叩き、小さき節穴よりさし覗きて、『お戎さん來ましたぜ』と念を押して來るものさへある。

十日戎の日に、島の内難波新地の藝妓が寶惠籠とて飾り籠に乘りて、今宮の戎へ參詣をする。乘りたる藝妓は白襟黑紋附、第一番に參詣するを一番駕籠と呼びて、此廓人の最も名譽とするところであるさうだ。棒の先には引綱とて紅白淺黄の縮緬三筋を結びて、揃ひの法衣着たる幇間妓丁數十人、同じ染め手拭を打ち振りて、引綱を曳くもの音頭をとるもの、異口同音に『寶惠駕籠ほい、寶惠駕籠は

い』と、叫びつゝ躍り狂ひて參詣する、これを五十挺倍しと云ふのである。昔は長襦袢一つとなり駕籠に跨りて、行く〳〵蜜柑などを撒きたるもあつたさうだ。二番駕籠、三番駕籠も夫れに準じて勢ひの好いものである。この事は何時の頃より始まりしかは解らないが、傳ふる所によれば寶永年間、堂島南中町にありし妓樓を、曾根崎邊に移したる時、人氣を集むるためにとて、垂駕籠の垂を外づし屋根より柱までを紅白の絹にて綾どり、晴れの衣裳を着たる遊女を載て、天滿天神に詣でし名殘の今に殘れるものであらう、されど北の新地には當時絶えてかゝる事はない。

三河豐橋の「あか」祭り

三河豐橋の或神明社の祭事には、天狗黑鬼赤鬼が出る、これは氏子の若者の中で當番が假面を被つて巧に化裝るので、赤鬼は片手に

撞木を携へ黑鬼は榊を持ち、天狗は甲冑を着て薙刀を小脇にかい込み、徐々と社殿の前に練出し、茲で天狗と赤鬼との爭鬪が始まり互に挑み合ふこと暫時、終に赤鬼は天狗の爲に薙立てられて敵し難く、撞木を擡げて境内を逃出し市中へ走る。其跟には赤足袋と黃色の足袋とを、片々づゝ穿きたる一群の若者が團扇を揚げて『あかー、あかー』と呼びながら、饅飩粉に塗れたる白飴を投げ撒く。この飴は惡病除けといふので、群り集まれる見物人は爭ふて拾ふから、其雜踏は一と通りではない、着飾りたる娘などが頭から時ならぬ雪を浴びて、折角の粉裝も滅茶滅茶になる。此地方ではこの神事を俗に『あか祭り』と云ふて居る。

美濃岐阜の美江寺祭

美濃の岐阜に『美江寺祭』と云ふのがある、美江寺といふは町の

名で、毎年二月に之を行ひ「お蠶祭」と稱へて、近郷近在の老若男女が夥しく信仰する。この祭には年々猩々が柄杓を持つた人形を山車に飾つて、それを午後四時頃人の出盛り時分に手は手、足は足と猩々を細々に裂いて山車の周圍の群集の中へ撒散らすのを、蜘蛛の子の如くに集つた者は我勝ちにと奪ひ合ひ、容易ならざる紛雜を惹起し、彼處でも一組こゝでも二組と、僅か尺にも足らぬ竹切や猩々の髪にしてあつた赤く塗めたる麻などを、五六の若者が引張合ひ果ては巡査の仲裁で、一寸ぐらゐづゝに分て貰ひ漸く納得するといふ意氣込である。それは此猩々に用ゐた一切の物何でも養蠶の時に、蠶の下に敷けば蠶の成育が非常に善いと云ふ迷信からだ。又猩々の持て居る柄杓が上を向けば旱魃で、下を向けば大雨だと懸念する、的中した年はないが何時も心配する。

大和蛇穴の汁掛祭

大和國南葛城郡秋津村蛇穴といふ所では、毎年陰暦五月五日に「汁掛祭」と云ふ奇祭を行ふ。この日村の重立ちたる家では、三斗三升三合の味噌汁を煮て、村中の小供に食はするので、其座敷には鋤鍬鎌のやうな農具を澤山ならべてある。食事が濟めば小供等は持ちたる箸で互に當合をする。その理由は知らぬが、其後小供等は並べてある農具を手當り次第に持て逃げる。而して持て逃げた農具は其者の有となるのである。

この日若者は周圍三尺丈十間程の柴で造つた蛇を、村中ひきまはした後野口神社へ持行きて社を取まく、これと同時に村内の小供は男女を問はず他村へ馳逃げるのである、この時一方には社前の汁を入れたる四斗樽の五六本は口を開かれ、若者等は椀を手に持ちて見

物人にかける。掛けられた見物人は喜び勇んで居る、神官は形の如く式を濟して歸る。そこで若者は他村へ逃げ行きし小供を連れて歸るのである。

この祭の起因を聞くに、此村は元と二室といつて小さな村であつたが、一人の豪家の娘が彼の名高き役行者に戀をした。が女嫌ひの役行者は何とて之に從ふべき、娘は悲しさ腹立しさの餘り蛇となつて、行者を取殺さんとしたが、行者は法力を以て娘の蛇を井戸へ封じ込めたから、蛇の穴と書いてさらぎと讀み祭禮に蛇を出すのださうだ、又娘が行者に戀をして居る時下男が娘に『貴女が行者に惚れて居なさるが、女嫌の行者が美人なら兎も角、あなたのやうな方を嫁にするものですか』と云つたから、娘は大に怒り傍にありたる汁をかけたので、今尙汁をかけるのださうだ。又小供が村を逃げ出し農具を持て逃げるのは、其時村に蛇が出し爲め、村民が農具を手に

して逃げたからで、汁をかけられて喜ぶのは身躰が健康になると云ふ迷信からで、中には二三里を遠しとせず來る者もあるさうだ。

近江筑摩の鍋祭

近江國坂田郡入江村大字淺妻筑摩の鍋祭は、古來有名なもので「筑摩祭」或は「鍋祭」とて俳諧の題になつて居る。馬琴の歳事記を見るに

近江の國筑摩の庄は大膳職の御厨の地にして、此地に御食津の神を祭る。この神は稻食を掌るに依て、里女婚をなす時は祭禮に必ず釜鍋を載きて神に奉ず。不幸にして少壯の間に寡となるときは、再び嫁する女あり。かゝる輩は其鍋二枚を用ゐ、三たび嫁するものは三枚を載きて神幸に候ず云々。

とある、昔は再婚の女は二枚の鍋を冠り、三婚の女は鍋三枚重ね

て、神幸のお供をしたに引き替へ、今は八九歳の少女が鍋女を勤めるさうだ。今其模樣を記さんに、毎年五月八日（歳事記には四月一日或は四月午の日とあり）午後四時頃拍子木を相圖に、行列の供一同は、村の北端なる御旅所に集つて左の順序で本社の方へ繰出すのである。

第一番	神劒	十本	
第二番	太鼓	四個	
第三番	金棒曳	十五人	
第四番	上多良村	山法師	五人
第五番	中多良村	山法師	五人
第六番	下田良村	山法師	七人
第七番	筑摩村	山法師	十二人
第八番	神女		八人
第九番	踊り奴		二人
第十番	鍋冠り		八人
第十一番	伶人		
第十二番	鳳輦		
第十三番	神官		
第十四番	曳山		

一々之を説明すると長くなるから、其内の珍らしいもの二三を記さう。

▲山法師　これは各氏子の村々から、七八歳の男子を以て役を勤めさするのであるが、何れも大柄のどてら布子に、白縮緬の十字襷白の手覆に紺の脚神、重ね草鞋といふ姿で、手には長刀又は錫杖を突て居る。顔は假面の如くに白粉を以て塗り、其へ青髭黑髭奴髭なを描き、向ふ鉢卷で母衣と云ふものを負つて居る。母衣は源平時

代の勇士が背に負つたものと同じ形狀であるが、この祭の母衣は縮緬或は緞子の女帶二筋を交叉して、白縮緬の腰帶で結びつけたもので、是に一本の旗と紙製の花の枝數本とで組織せられてある、筑摩の鍋祭りに女帶の母衣は一寸興味のあることである。

▲神女　は御神子のことで、俗に『しんこう』と稱へて居る。踊り奴は兩掛持であるが、二人幷んで奇妙な足の運び方をして、行列に加はつて居るのである。これは近年加へた者らしい

▲鍋冠り　所謂筑摩の鍋女で、往年の嫁女が今の少女と變更したもので、この村の少女八歳になれば、必ずこの鍋女に出る習慣で、勿論貴賤を論せず一度はこの役を勤めねばならぬさうだ、衣裳は多く繪に畫いてあるのを見ると、白小袖に白繪子の前帶をゞめて、鍋を冠つて居るやうだが、現今の姿は大に相違して居る。赤の小袖に萌黃色の水干、緋の縫模樣の裾袴といふ姿で、手に扇を持て居ると

ころなど、八乙女としか思はれぬのである、又鍋女は年々八人と定つて居て、四人は角のない鍋で、四人は角のある鍋である。現今は眞正の鍋を用ゐず紙製のものを使用する、て此鍋冠りは毎年四月八日神主が玉串を神前に捧げて、其人名を指名するので、指名せられた子女は、此日より神聖犯すべからざるものとして、其父兄の恐悅は非常で家人とは別浴し一切精進料理で、恰で天女の降臨でもありしかの如くに尊敬するさうだ。

行列が本社に着いても別に變つた式もなく、其儘退散する。

武藏南部領の振袖嫁兒

埼玉縣北足立郡に南部領と云ふ一大村落がある、其近所の大宮町には例の大宮公園があつて氷川官幣大社がある、恰も櫻花の好時節を期して一大祭典を行ふ。この日の一番の見物といふは『振神嫁兒』

といつて、既に夫のある婦女の、二十歳前後から三十歳までの者が姑附き添ひで、今日を晴と着飾り、頭髪は一樣に嶋田髷に結ひ、花やかなる簪を右に二本左に一本挿しかざし、顏一面に厚化粧をして推出すのである。中には汙のために斑色になつて黑い素質を表はして、醜形な風になつたのがある、それが縮緬の振袖裙模樣で藍瀞鼠色と松竹梅の縫、黑藤紫中段のぼかし、八ッ橋鶴龜などの縫模樣等にて、帶は綿襦袢、腰に緋鹿の子絞りの扱帶をだらりと結び下げる時は春暖の候にも拘はらず四五枚を重ねて、腰を据えて八文字を踏んでの歩行振、何う見ても花魁道中を見るやうで一驚を喫するの外はない。

出雲松江の「ほーらんえいや」

出雲松江の舊城内に鎭座ます稻荷神社は、十三年目毎に神幸式

とて、松江を去ること三里大橋川の下流なる、八束郡出雲郷の阿太加夜神社へ渡御せらるゝ例となつて居る。『ほーらんえいや』とは此渡御の神事の際に謠ふ船唄である。

藩祖直政公が御國入りの際、豫て御信仰になつて居る稻荷樣を伴なされたが、松江城に入るに方つて社殿の造營が出來て居ない爲め、暫時阿太加夜神社へ奉安して置て、後城内に鎭座せられたのださうだ。この緣故から出雲郷から十三年目毎に御神幸の神事をなし五穀豊穣天下泰平の御祈禱をすることになつて居る、今でも御神幸の年は豊年に極つて居ると農家は云ひ傳えてある。

御神幸の日は舊暦四月の十八日、昔時から今日まで雨が降つたことがないさうだ、當日は早朝から社殿で祭事がある。了つて御輿を御城の濠から御輿船に遷し、神器船音樂船講中船が護衛して、大海崎大井富福矢田の五ケ村の船が最先に一丈ばかりの御幣を立て、一

船に八人づゝの揃ひの衣裳を着た櫂方、二人の囃子と踊子とが乘て居る。これが御輿船を曳て御濠を一周して、大橋川を下るのである踊子は刷毛毛の海賊式打扮で、金ピカの櫂を手にし、又他の踊子は道成寺の清姫といふ風で采を振て囃子につれて踊る、其囃子は、

「ほーおおえんや、ほーらんえんや、えやさのさ、えいら、らのらんらん、」

と云ふのである、安藝の宮嶋の船唄を眞似たもので、加賀浦の船頭が聞習て來て教へたものださうだ。踊子の引船は昔時から嚴かにこの五ヶ村に限られて、年齢は十七八、兩親共健在のものに限るのださうだ、何しろ十三年に一度といふのだから、當日の雜沓は非常なもので、老人などは今一度これを見ることが出來るやら、出來ぬやらと今昔の感を深からしむると云ふことである。

山城宇治の大幣神事

山城國久世郡宇治町に『大幣神事』といふ祭典がある。この神事は宇治關白頼通公が宇治に政を執りし時、天下泰平國土安穩萬民豐饒五穀成就祈念の爲め、當地離宮八幡へ奉幣せしに始まり、平等院に於て年々執行せしが明治初年の頃宇治町で行ふことになつた。

此神事を俗に傘御幣といふて陰暦五月八日に行つたが、今は新暦六月八日に行ふのである、この祭には大なる御幣を作るのでこの名があるが、其構造の概略を云へは幣串は一丈二尺、幣串の上部に正面六尺横二尺余の棚を造り、其棚の周圍に五垂或は七垂の端布といふ幣をつけ、幣扇の上へ一丈六尺の木棉を張る、又棚の上には棚松とて三本の松の木を立てある、この棚松は三神を祭るのだと云ふけども、其何神たるやは詳かでない、其松の上に黄色の傘を三本立て

る、この大幣は六月四日頃より縣神社の近傍なる大幣殿に祀るので大幣殿の傍に杓鋒と云ふものを立てる、杓鋒は竹の先に籠二つを合して球の如くにし、其周圍に竹杓七本を車の如くにつけ、八幡大菩薩と書せる小旗を下げたるもので、五穀成就祈願の祭りであるから籠は五穀の器又七本の杓は水車の形にて、苗代水を祈るためださうだ。

祭典の當日なる六月八日は早天より大幣殿を飾り、午前十時頃宇治町の各神社の社司社掌は祭服を着けて參向し、祭典係氏子總代其他有志者參列して式を擧ぐる、この時大幣殿の前は幕を引繞らして諸人を近附けぬが、式が終れば幕を撤し大幣を出して巡行を始むるのである、其行列は眞先に白丁四人にて眞榊を舁ぎ行き、次に町々より出す神事の旗數流を押立て、次に警護の者數十人道の兩側に整列して供奉する、其服裝は往時は麻裃を着し、一文字笠を翳したさ

うだが今は羽織袴である。次に烏帽子素袍を着たるもの三人唐團扇を持ちて行く、これは往古平等院にて此祭を執行せし時、同院内の三院家なる法恩院智恩院法興院の翳しなりといふ。次に大幣を若者十餘人、淺黄地に白の幣帛の模樣ある浴衣の如きものを着して舁ぎ行く、これを力者といふのである。次に社司社掌數名騎馬にて供奉する。

この行列が宇治橋の畔に到る時眞榊大幣を安んじ、神官は祝詞を奏する、終て再び列を整へて進み途中より傘鋒列に從ふのである。傘鋒は傘の形にして其上に鷺と薄を飾り、周圍に幕を垂れ其中にて太鼓を敲き鉦を打ち、又十二三歳の兒供二人鬼の假面を被りて從ふのである、この傘鋒は昔時は日本六十六國に象り、六十六本あつたさうだが今は僅に一本あるのみだ、進んで宇治神社の御旅所に到れば、社前に大幣を奉祀し一同小憩する。この時御旅所の前にて御方

衆の馬馳けがある、終りて行列の御旅行を出づる頃、大幣殿より施頭（役名）祚の股立を高く取り、梅の枝を携えて走り來たり、大幣の前に拜禮して又大幣殿に引返し殿前に禮をなし、再び巡行中の大幣の方に走り行く、斯の如く往復すること七回であるから、これをお七度の御使といふのである。

行列が宇治の町を一周し大幣殿に歸れば、神官は神退と云ふ式を行ふ、それは大幣を三回廻して地上に倒し、綱をつけて力者が之を曳ずり疾走して宇治橋に到り、橋の欄干へ立て掛けて置く、昔は立て掛けずに河の中へ投げ込むださうだ、大幣を曳き行く跡へ御方衆は馬を馳せ、里人や子供は聲を揚げて之を逐ひ、幣帛の切れて地上に散亂するものは競ひて拾ひ家に持歸る。これを門口に吊して置けば盗難を免ると云ひ傳へてある。

大幣巡行の時に大幣が屋根に觸る時は其家に凶事があると云ひ、

又大幣の笠の色其他の形狀且つは當日の晴雨にて農家は其年の豐凶を占ふことが出來ると云ふので、近村から見物に來る者甚だ多く、非常の雜踏を極むるのである。

攝津西宮の御腰や祭

攝津西の宮で先づ屈指の場所、市中の中央に一つの小さな神社がある。常には荒廢のまゝに打捨てられてあるけれども、毎年陰曆五月十四日を以て祭禮を行ひ、其都度戎神社の神職が來ては式典を擧ぐる、之を『御腰や祭』と云ふ。この祭禮については古來參詣者中に妙な風習が行はれて居る。何分夏のことであるから夕方から納涼かた〳〵、町内の若者等且つは良家の子女等が三々五々群をなし、午後六時頃には其近傍中々の雜踏である。此混雜の場合に乘じて其男女、且つは何人たるを問はず參詣相者互間に於て、突然後方から

尻のあたりを捻るのである。未だ甚だしきは逃ぐるを追ふてまで遂行する、殊に蓮葉の娘などは却て得々として居るのである。今は警官の注意で漸く薄らいては來たが、然し警官の居ない所では今猶行はれて居る。『お腰や祭り』と云ふ名はこれから出たのである。

磐城原町の野馬追祭

毎年七月一日二日の兩日に、磐城國相馬郡原町に於て、野馬追祭といふを執行する。この祭は中村太田小高の三妙見の、原町に集合して祭禮を執行するものであるが、其他甲冑騎馬旗差物揃ひにて一二千も出る事であるから、中々雜踏を極はむるのである。

七月一日は未明から各神社とも出陣の準備を整へ、早朝法螺陣太鼓を以て下知し隊伍を組ませ、原町指して詰め來る有樣は、恰も昔時の戰場に出陣するやうで、自然昔時の光景を追想して自分ながら

雄々しき感を抱くのである、其日も午後二時頃に至れば第一着に太田神社、第二着に小高神社次に中村神社等、路の順次に原町に着して夜の森に休息し、こゝにて競馬の餘興がある、之を宵乘りと云ふので、この宵乘りが終れば一同宿へ歸り、三社は原の町に一泊し、翌二日は早朝より町の中央で法螺貝を吹き、早々出陣の用意あるべしとの相圖をすれば、甲冑騎馬旗差物の準備をなし、第二の法螺貝の鳴り亘るや町里の別ちなく、續々新田川原を指して出陣するから、川原一面は甲冑騎馬を以て充たされてある。午前八時頃にもなれば行列を整へ本陣を差して押行くのであるが、進退の號令は法螺貝又は陣太鼓である。三社共本陣に備へある神座に着けば、こゝで休憩また晝食をなし、終つて法螺貝の相圖に數千の騎馬が時を得顔に、一定の場所に走り行く有樣は、恰も目前に敵兵の襲ひ來れるやうである。これにて式は終り夫々の餘興がある。

阿波白鳥の輪拔

阿波國名西郡石井村白鳥に白鳥神社といふがある。社は小さいけれど山の半腹にあつて松杉欝蒼眺望頗るよろし。祭禮は舊四月なれど別に舊六月卅日に『輪拔』と稱ふる神事がある。そは割竹を以て大なる輪を作り、赤白青等の色紙を以てこれを覆ひしものを、社前の華表に結びつけて、參拜者は必ずこれを拔て堂に昇るのである。往昔より行はるさうだが其緣起は解らない。

伊勢桑名の石取祭

石取祭は毎年七月六七の兩日、伊勢國桑名町で行ふ祭典で、六日の午前二時『たたきだし』と云つて、各町共其組合町中で春日神社に近い處に祭車を整列し、一杯機嫌で流行唄を謠つて如何も活潑な

勇ましい有樣だ。社務所では零時頃から祭典委員や、各町總代等六十人餘羽織袴で參集し、神前で祝詞をあげ、其終ると共に神前の太鼓を打つ、これが所謂『たゝきだし』の合圖で、忽然百雷の一時に落來つたやうな凄じい轟がする。これ例の狂氣祭が始まつたのである、四十餘の祭車に太鼓は一つづゝであるが、鉦は少くも三つ多きは十挺からつけて居る、一時にやるのだから耳を聾するばかりだ、いよ〳〵叫き出すと足腰の起ぬ者の外は、老幼男女の別なく、男が女の姿になり又女が男の風をまね、各自思ひ〳〵に樣々な裝をなし宛然狂氣の樣で、『おーりやー』『ほー』『きやアー』『そこちや』などゝ掛聲して、夜の明るまで調子を揃て、各其組合町内を練り歩く、それからは飲んで食つて一と寢入する。午後三時から『御神樂』と云つて、『たゝきだし』のやうな亂暴な風でなく、普通の衣服を着て眞面目に車を曳出し、前夜のとほりに整列して、春日神社即ち桑名宗

社の方を拜禮する。此時神前では前夜集まつただけの人々參列の上、嚴かな儀式を行るのである。扨並むでる祭車は黄昏燈を入れて曳出す、すると今迄温厚さうであつた娘が、忽ち足袋跣足で浴衣の尻を端折り、手拭で頭を包み手袋をはめ大層な元氣で、『おーりや』の掛聲で鉦を摺る樣は、何してもお嬢さんとは見られぬ。それから續いて午後十二時迄太鼓を叩き、鉦を摺り、組合中を騷ぎ廻るのだ。十四五年前までは曉まで續けざまにやづたのださうだが、今は十二時頃で一と休みし、翌七日の午前二時頃から又始めて朝迄行る。

七日は本額で午後三時迄に四十以上の祭車が、極度の盛裝て順序正しく整列する、順序は社務所て七月一日に抽籤するのだ。其順番に依て南は鍛冶町から傳馬町を通り、福江町までに、北は寺門から今一色太一丸の邊に列ぶのて、今年南の方へ列べば來年は北といふ習慣てあるのだ。

午後三時半から一番の祭車が動き始めて、十二時頃迄に全町の車が春日神社の前を過り、社の門前へ來ると必ず祭車を正面に向け直し、暫く止まつて敬意を表して後、徐々に進むで本町川口町を通過し、各々の町内へ曳歸ると茲に石取祭の終結となるのだ。

祭禮の前日即ち五日の夕景には、各町共揃ひの衣浴を着て、小供大供列をなし、

『おーかッさんは、うちにか、○○○○○○○○、鋏でちぎッて、ほーッたッた、ほッたほッたー、

『町屋磧のおなあでしィてををさまァよ、あら、ひいるうはしィををれえてよおるひひらく、あでんやく、

『私の娘を福じやと仰やる、福は福じやかお多福ぢや。

なぞと元氣よく男女打交つて唄つて歩く、これが小供には最大の樂で、六月頃から僂指數へて待ちに待つて居るさうだ。

尙鉦鼓を打鳴らす拍子は蠻勇なもので、『七ッ拍子』『五ッ拍子』の二種ある。七ッの方は五ッの方より緩くりで、はッきりしてゐる。

信濃別所の嶽の幟

信濃國小縣郡の別所溫泉場の西に、男神嶽と云ふ可なり高い山が聳へてゐる。木は一本も無い芝山で、其峰に男神嶽神社といふがある。毎年七月十五日に、此上の峯から大きな幟を樹てゝ降る儀式がある。俗に之を『嶽の幟』と云ふのである。

この祭典を行ふには、十五日の前夜に用意して置くので、其晩になると皆手に手に大な幟を擔いで上る。そして山の峰まで行くと幟を伏せて、人は各芝生に轉寢する。十五日になれば早朝より笛太鼓の音が聞ゆる、山が高いから、勿論峰に居る人は見えないが、その音は手に取るやうに聞えて、恰ど天女や仙人が雲の上で舞樂でもや

るかのやう。夏の事であるから太陽の出ないうちは、山一面に霧が置つて居る。軈て夏の海の眞紅な陽が東の山に現れると、霧は次第に薄くなつて、何時の間にか消えてしまつて、山が屹然と聳つて居るのが明瞭と知れる。笛太鼓の音は益々明かになつて來る。嚠喨たる笛の音、蘂々たる太鼓の音、奏樂の內に數百本の幟は樹てられる、其色は紅青白紫黃等の種々で、それが朝日に輝いて實に艶麗である。かくて亂列樹立して居た幟は秩序整然一列になつて、漸次に山を降り初める。それが中々の見物である。幟は朝日に映じ、笛太鼓の音は鯨波の聲と相和するのである。

幟の行列が山を降きると、それ幟が來たといふもので、其道筋へ出て眺めて居る。行列は町を横斷て端にある村社、縁結の社まで來て留り、各幟を納めて家に歸るのである。この祭典を行るには村を三分して毎年交代に行ひ、假令其當日は雨が降らうが風が吹かうが

其儀式は必ず行る。幟の構造は太く長い竹へ、二反或は三反の布を結びつけ、布を長い輪形にしたもので、布の色は各自分の好みに應じて勝手に選み、そして終には其布は各自の用ゐ物にする。

大和倭文の蛇祭

大和國添上郡辰市村西九條にある倭文神社の蛇祭は、數百年以前より行はれて居る奇習である、毎年陰暦八月二十五日に、村の若者連中は揃ひの麟金手拭で鉢巻をなし、長さ七八間廻り一間半位の柴にて造れる、細長きものを村中引き廻り、遂に倭文神社へ持行き樹に括り附けて置く、暫時すると太鼓の音と共に御渡りがある。この御渡りなるものが奇なるもので、神官が二人の兒供を連て來る。そろ〳〵式が始まると土にて造りたる菓子、人形花餅御幣等が供へらるゝが、終には里芋にて造りたる蛇が渡る。この時二三十人の若者は

先に持來たりたる、柴の長く束ねたものへ火を點じ之にて式が終るのであるが、尚神前に五六歳の小兒の角力がある。

この蛇祭の起因を聞くに、數百年前はこの村は山であつたさうで山の頂上に神社があつた、即ち今の倭文社だ。毎年男の小兒がある家の屋根に白羽の箭が立つ、さうすると箭の立ちたる家の者どもは互に圍引をする、當つた者の子は神へ献げねばならぬ。惜しい悲しいが詮方がない、陰暦八月二十五日の夜に神に捧げるが、翌日行けば小兒は必ず居ない、この小兒は何ものにか食はれて了ふのだ、數十年毎年一人づゝあげて居たが、或時一人の僧がこの村に來たり、哀れなりとて當日自分が代つて行て、大蛇を殺したと云ふので今尚祭禮に蛇を出すのださうだ。

因にこの僧は理元大師と云つて今尚堂がある。また蛇を埋た處は蛇塚といつて一つの塚と社がある。

紀伊上和佐の笑ひ祭

「笑ひ祭」と云ふは毎年陰暦十月初卯の日に、紀伊國日高郡丹生村字上和佐にある丹生明神社に於て行ふ奇祭である。此日村の老人は柿蜜柑などの果物を一顆づゝ竹串に貫き、之を一斗入の桝の内に數十本さし並べ、其眞中に幣を立てたるを高く捧げて、各自神前に至れる時、其中の先達が高聲にて「例年の通り皆の者笑ふじやないか」と云へば、一同其聲に應じて大聲に笑ふので「笑ひ祭」とは名けたのである、其由來を聞くに十月は諸神出雲の國に至りたまふに、この神のみ獨り後れたまひて、行くを得ざりしを笑ふより起れるのだと言傳へてある。

山城伏見の御出祭

山城國紀伊郡伏見町の三栖神社で、毎年十月十二日に、御出祭と云ふ式典を執行する。祭禮の渡御は日暮過ぎ八時頃、最初に高張提灯を持つた少年が「わアー」といふ掛聲で走り出すと、次に周廻六尺丈け一丈と、周圍一丈、丈け一丈五尺もあらん斗りの葦で造つた大松明に點火して、數十人掛りで擔いで走り廻り、社から三町程距つた河端へ据置くのである、其時は全然で大厦の火災に罹れる如く、火粉が飛散し火焔の水に映ずる樣は、實に美觀である。

此の故事を聞くに、昔し御香宮（伏見町の氏神）の神輿が、出水の爲めに流された時、神が之を拾はふとして葦で眼を突き、片目となられた故、御出祭には松明を點じ道路を明るくするのであるさうだ、がまさか神樣がそんな粗忽かしい事は爲られまい、又この松明で手を炙ると、冬季になつても決してしもやけや龜で苦しむことはないさうだ。

其所で、大松明の火焔が衰へた時分に、松明を持ち廻つた老若の人々が、さも愉快さうに神輿を擔ぎ廻り、旅所へ持ち行くのだが、別段旅所とてもないから、矢張元の社に持ち歸るのである。

伊勢の丹生川祭

伊勢國員辨郡丹生川村に鳴神社と稱する一の古社がある。この祭禮は毎年十月二十日の夜を以て行ふので、祭日十日許前に一村の三十歳以下の男子は、一人も殘らず定めの場所に寄り集り、各自菜種莢の如き燃易き材料を持來り、長さ十間周圍三十尺有餘の大なる松明二本を作設き、當日になれば日の暮るを待ち、多勢の若者一定の服裝をなし鉦太鼓を打鳴らし、『えいやさ、〳〵』の掛聲勇ましく松明を社地に運ぶが、大抵夜の十一時頃社地に着するのが例である。こゝに可笑きは『七度半の使』とて、瀨古半兵衛なる丁髷の老爺を

迎ふることである。これは幾百年以前の事であるか、同人の先祖が曾て大洪水のありし時一箇の神體を發見し、爰に鎭め祭りし故であると言傳へてある。かくて瀨古半兵衛が何時頃の製造にかゝる物にや、中なる燭火の殆ど見え難きまで古く煤けたる、小田原提灯を携え來たりて、恭しく社前に進み三拜の後、携え來たりたる提灯の火を以て彼の大松明に點すのである。かくて火の松明に移りて燃上るや、若者は『でやゝ〳〵』の懸聲で二個の松明を立てるのである。これを夜鋒松明と云ふ。それでこの松明が燃盡くせば若者の一人が太刀を持來りて、鳥居際で鞘を拂ひ白刃を兩手に持ち、これを膝の下に下げて兩足を揃え、前より後へ前より後へ廻しつゝ飛び越しながら神前に進む、これを『とび』と稱へて當日の主眼であるさうだ。

駿河島田の大奴

駿州島田町の大井神社の祭典には、一種奇異なる習慣がある。この祭禮は三年に一度、即ち寅年巳年申年亥年の、新暦十月十三日より十五日迄三日間で、全町の或一町の如きは往昔の大名の道中の模様を象、體格肥滿なる若者二十五人を選み出し、これを『大奴』と稱し、長さ六尺の木刀を兩腰に差し、其下げ緒として市中の財産家の娘又は妻君の、縮袗其他の上等の女帶を供受けて、一本に二筋づゝかける。帶を貸した者は之を誇るのであるから進んで貸せるので、「島田へ嫁にやるには上等の帶を持たせて行らねばならぬ」とこの地方でよく言ふことである。大奴の着衣は襟は大筋の袢天を揃へ列をなして手を上下に振り、其後へは大鳥毛を五六人振廻し、其次に八九歳より十五六歳位の男子陣笠を冠り、紋附羽織て立附を履き

大小二本を腰に差したる者が百人許り、其後へ殿樣が七つ蒲團を置きたる御馬に乘つて行く、この殿樣は町内の財産家の息子で、十歳未滿の者を撰む、殿樣に當りたる家では非常なる費用を要するが、却て之を名譽として居る、而して此殿樣御足具御寶物御着物とか、種々なる物を美しき長持へ、當家の定紋のつきたる淺黄の覆をかけ御供が之を擔へて其後に從ふ、この行列は三町餘續くのである、祭日十三日十四日に神社に繰込み、尙他の一町にては笛太鼓て十歳前後の男子が、手にさゝ、皷などを持ち鹿島踊をして同じく神社へ繰込む。他の各町の若者は揃ひの半纏を着し、町々各々美しき山車を引き出し、縮緬錦にて飾り立て、上踊地踊て是れ亦神社へ繰込むのである、拾五日に神輿の御渡がある。

この祭典は俗に「島田の大奴」と云つて、この地方ては『見ないも馬鹿、二度見るも馬鹿』と云つて居る。兎に角一度は見てもいし

奇祭である。

山城太秦の牛祭

古來名高き太秦の牛祭は、京都三條通の西二里許りなる太秦村廣隆寺で、毎年十月十二日に執行する。今其次第を記せば、當夜十時頃五人の僧侶が五大尊の形を表し異形の面を冠り、太刀を佩き幣をさゝげて牛に乘り、四人は槍を持て前後を圍み、近村より出る花車は火を點じて四邊を照し、從者は松火をふり立て、行列整々と本堂の傍より、西の門に出て、正面の門より入りて本堂を巡り、祖師堂の前なる壇上に登りて、一種妙なる節をつけて、次の祭文を讀む。讀み終れば一散に祖師堂に驅け込み、これで祭事は終るのである。

祭文

夫以性を乾坤の氣に享け、德を陰陽の間に保つ、信を專らにし

て佛につかへ、愼みをいたして神を敬ふ、天尊地卑の禮を知り、是非得失の品を辨ふ、是れ偏に神明の廣恩なり、是に因て單微の幣帛をさゝげ、敬して摩吒羅神に奉上す、豈神の恩を蒙らざるべけんや、是に因て四番の大衆等一心懇切を抽て、十抄の儀式をまなび、萬人の逸興を催すを以て、おのづから神明の法樂に供へ、諸衆の感歎をなすを以て、暗に神の納受を知らんとなり、然る間才槌頭に木冠を戴き、くわひ羅足に舊鼻高をからげつけ、からめ牛に鞍を置き大間をすりひきて、哀しむもあり、やさ馬に鈴をつけて踊るもあり跳るもあり、偏に百鬼夜行に異ならず、如是等の振舞を以て摩吒羅神を敬祭し奉る事、偏に天下安穩寺家安泰の爲なり、因之永く遠く拂ひ退くべきものなり、先づは三面の僧坊の中に忍び入て物盜る錢盜人の、奇怪さはいふもはや小童ども、木々の鳴物取らんとて、明り障子打ち破る骨なき法師頭もあやふく

ぞ覺ゆる、扨は朝腹頓病すはぶき瘍瘡ようさう闘風、殊には尻瘡虫かさ膿瘡あふみ瘡、冬に向へる大あかゞり、並にひゞいかひ病鼻たりおこり心地共すぢさはり傳屍病、しかのみならず鐘樓法華堂かはづるの讒言仲人、いさかい合の中間言、貧苦男の人だより無能女の隣ありき、又は堂塔の檜皮喰ひぬく大烏小烏め、聖教やぶる大鼠小鼠め、田の畔うかづうごろもち、此の如き奴原において、永く遠く根の國そこの國まで拂ひ退くべきものなり、敬白謹上再拜。

この祭りは聖德太子初めて執行したまひ、祭文は弘法大師の作つたものだとの事であるが、頗る珍無類の文句である、

伊豆伊東の尻摘み祭

伊豆國熱海より南方五里の處に伊東の溫泉場がある、往時は伊東

入道祐親の居城のあつた處で、名所古跡の探るべきもの數多ある。此地の玖須美に音無明神とて豐玉姫命を祀てある。一說には此明神は源頼朝此地に流寓の身なりし時、伊東祐親の女八重姫と密に情を通じ、屢音無の森中に密會せしを父祐親の聞知する所となり、終に殺害されしを祀つたとも云ふ、此祭禮は毎年十一月十日の夜で、先神前に線香を立て以て燈明に代へ、其他は總て闇夜となし村人を集め、神殿にて神酒を賜はるのである、土器を廻すも暗中無言、只順次に尻を摘て廻すので、此夜は村内歌舞音曲を禁じ、參拜者亦提灯を携へず。境内に入れば何人でも闇はず尻を摘むので、夜に入れば婦女子の參拜する者は一人もない。俗に之を『尻摘みの祭』と稱へてある。

東京の酉の市

『どうも今日の酉は賑かだッたぜ』と、手柄顔に酉の市の景況を吹聽してゐるのは東京人の特色である。このお酉樣は一名を慾深樣と申し奉り、總別に慾心滿々たる徒輩が、最も有難しと拜み奉つる御神に在ますとの事で、葛西花又村に鎮座まします鷲大明神が、本家本元ださうだが場末の爲か繁昌しない、先づ下谷龍泉寺町の鷲神社を東京第一として、これに亞ぐは深川八幡境内の鷲神社、次に品川四谷巣鳴目黒等であらう。十一月初めの酉の日を初酉と稱へ、次は二の酉三の酉と稱する、當日の混雜繁昌は非常なもので、筆紙に盡し難しとは實にこの事で、其實地を見ぬ人は宛然嘘と思ふくらゐである。

各鷲神社も平日は殆ど參詣人の影を認めぬ位であるが、祭の當日になると俄に東京市中の人の氣がこゝに集つて、幾萬人が渦卷て押寄せるは實に不思議な譯だ。そこて當日は夜半から神前を勿體らしく飾立てゝ、午前二時頃から社掌が祝詞をあげる、つゞいて四時頃から神樂堂て七十五座の神樂が始まる。さて神前には新橋柳橋日本橋下谷等の藝者屋を初め、待合料理店船宿又は吉原洲崎の各貸座敷引手茶屋その他の諸藝人すべて、慾心の淺からぬ連中から種々の奉納物、境内及華表前には同じく花柳社會又は諸商人からの奉納の提灯、それもこれも幾百となく、或は山の如くに積み重ね、或は星の如くに懸列ねたる光景は、實に眼を駭かすばかりてあるが、之を解剖したら信心が半分、廣言が半分と云つても差閊へはなからう。

當日の賣物は熊手が第一とする、元來鷲大明神を信仰するのは、利得を鷲掴みにするといふ、凄まじい大望から起つたことてあるから、萬事が慾一點張りから割出して來て、熊手は物を掻き込むといふ緣喜を祝ふ爲めとは、唯々その慾心の廣大無量なるに呆れるのみだ。隨て他の賣物も大頭と稱する唐の芋、又は黃金餅、勝米なんぞ都て

緣喜物ならざるはなしである。

當日はこの熊手を擔いで歸るのが外飾で、慾の重荷の大熊手を得意らしく肩にかけ、或は車の上に押立てゝ意氣揚々と引上げる、早朝から斯の如き有樣であるから、午後と來ては大變、混雜と云ひ雜沓といふよりも寧ろ騷動といふ方が適當であらう、東より西より曳々聲して押寄せて來る參詣人、無慮何萬人と云ふものが、狹い社頭に集まるのであるから、宛然亂軍の光景である、進むにも退くにも自在ならず、右へ左へ人濤を打つて押されつ揉れつ、たゞ夢のやうに悶き廻つて居る樣は、血池に漂ふ亡者も斯くやとばかり思はるゝ踏まれる揉まれる、帽子を飛ばす簪を落す、衣服を裂れる紙入を掏られる、中には人波に押れて我にもあらで泥田や溝へ轉げ落ちる。その騷ぎは何とも形容のしやうがない程で、生命に別條がないのが勿怪の僥倖である。

長門下關の先帝祭

長門國下の關に先帝祭といふ祭事がある、是は申すまでもなく、安德天皇阿彌陀寺即赤間の宮の私祭であるが、既に先帝祭と云ふ名からして妙であるのに、賤業者の娼妓が第一番の參拜者で、神前に進むで神酒を戴くのである。來歷はかうなんだ、平家の一門が壇の浦の波の底なる都へと供奉しまゐらせた後で、生存れた貴姫佳嬪の族が、はたと其日の生活に事を欠いて、昨日は高峯の花の色飽まで深く、綾羅の袖に空薰の香の染々とあつたのも、今日は捨小舟の楫まくらに結ぶ夢、腥き下郎と添寢する夜に圓らかならぬも哀れに、露曳る逢屋に濡れて色增す槭紅葉の、果敢なや浮かれ男に眺めさせて心に泣くも情なし、それも時世なれば是非もなく、雲の上なる月にも明暗ありと悟つたか如何だか、兎に角假令今の身は汚れもし零落

もして居れ、以前は誰あらう局なり上﨟なりし身であればと、扨ても先帝の御命日には第一の燒香第一の參拜をしたもの、それが今日までも猶行はれて、時の全盛なる娼妓が盛裝して參拜するのである。

駿河由比の太皷祭

駿河國庵原郡由比町字町屋原に、鎮座ましませる縣社豐積神社といふは、延喜式に列し木花咲耶姫を奉祀せるもので、大同年間坂上田村麻呂が東夷征討の際、戰捷を祈り其荒廢を起せし古社で、昔は官より祭祀を行なつたといふ。例祭は毎年陰曆一月十一月の初酉の日で、「太皷祭」と云ふを行ふのである。この日は氏子中總出にて老幼男女となく、各自思ひ〳〵に着飾り、中には滑稽なる異樣の扮裝をなして得々然たるもあれば、男女相携へ揃ひの手拭を頰冠となせるもありて、千狀萬態百鬼夜行の觀がある。若者は交る〳〵大太皷を

擔ぎ廻り、音頭につれて卑猥なる俗謠を唄ひ、盡夜村内を練り歩くのである。

常陸岩間の惡口祭

常陸國西茨城郡岩間村字泉なる愛宕山の絶頂に、鎮座ます愛宕神社と云ふのがある、其緣起を聞くに大同年間の開基で、毎年陰曆十一月十四日の夜二時から祭禮を始める、昔時は惡魔退治として近在の若者寄集ひ無禮講をなし、氣儘な遊びをし氣儘な惡口を吐きしが例で、遂に今日の『惡たい祭』となつたのださうだ。神社の奥の院に十三天狗が鎭座してあるので、村内から十三人の若者を抽籤で天狗に擇ぶ、擇ばれたる若者即ち天狗は、祭日の七日前より社務所に集まり、朝夕二回の水浴をする。而して十三日の夜二時、十三天狗は覆面白衣にて餅を搗き供物となす、十四日の午後八時頃より

は神官及十三名の天狗は、白衣を着け高下駄を穿き青竹を持ち、山中に鎮座ます諸々の神社に供物をして祭り、夫から本社の祭りとなるので、祭の始まる前に近在の若者は我先にと神社の庭内に詰め、篝火を焚き蓆の上に濁醪を飲み、負け劣らじと悪口を吐く其一例を擧ぐれば、參詣する人を見ては『貴様、青錢の二文や三文上げたとて何の信心になる、貴様の嗅アは食うに食はれないで背戸の松の樹で首縊りをした、早く行け此の大馬鹿野郎め』と云へば、參詣人も亦悪口を以て之に答ふる、實に毎年の熟練であるから其巧みなる事驚くの外ない、されど昔から喧嘩もなければ警察でも制さぬさうだ。

いよ〳〵祭禮の式事となれば、燈明篝火商人の店の燈火まで消し、悪口を吐きし若者連も皆無言である。今其式の概略を云はんに神官が神社に供物を運ぶを、十三人の天狗が青竹を持ちて守護する、此

供物を盗つた人は運勢が向くといふので各隙を見て盗まうとする天狗が之を見れば青竹を持て盗人の背中を敲く、敲かれても盗む者もある。供へ終れば悪口は又元の如く吐き、祭の全く終るは夜の明る頃である。

信濃倭村の大食彦祭

信濃國南安曇郡倭村大字氷室の畑中に最と神寂びたる宮居がある。毎年陰暦十二月十三日は例祭で、餘興を營み種々の悪戯をする、これを『大食彦祭』と云ふのである。毎歳氏子より米麥蕎麥の類合せて一石づゝを取立て、老若男女打集ひて思ひ〳〵に調理し、飲み且つ食ふのが例である。此日この祠前を往來する者があれば、其何人たるを問はず豫て調理し置きたる食物を他迄も饗ひ、否むも聞かでます〳〵強ひ、手取り足取り無理に口に含ましめ、呼吸が詰りて死

する者があるときは、其年は極めて豊年なりと稱へ打喜ぶのださうだ。こんな風であるから隣村の者は、此の日は固く相警めて此祠前に近く者はない。因にこの『大食彦祭』は信濃國に三ヶ所あるさうだ。

美濃揖斐地方の伊勢參詣

美濃國揖斐郡地方では必ず一年一回、新暦一月から四月の間に『伊勢參』が行はる、。即ち男子にして十五六歳になれば伊勢の大神宮へ參詣するので、一方に於ては若者の仲間入をした證ともなるのだが、一身一家の安全幸福を祈願するに外ならぬのである。これは義務的のもので必ず一度は參詣せねばならぬ。故に之を拒むものは一人もないが、兩親が何かの都合で今年は止めさせやうとすることがある。其時は若者連が承知せね、こゝで所謂拔參りとなる。

一體この伊勢參りは、參詣する本人よりも他の者が非常に運動する、何が故に若者連が骨折るかと云へば、歸村當日は旨い酒が飲めるのと、又一つは榮譽ある馬方がしたいから起つたのであるさうだ。それて伊勢參りは青年のみでない、女子もするので、其勸誘は矢張若衆がするので、本人が望みとあれば是が非でもさうさせねは得心せぬ。夫でも親々が承諾せぬことがある、其時は前にいふ拔參りを斷行させる、これが同行者中には何時も一人や二人はある。先づ其者を若衆が秘密に保護して、一里か二里先きまで送り出して置く、而して正當の者だけに宰領と云つて、既に何回も參詣したことのある、彼の地の事情に詳しい中年の人が附いて行く、途中で拔參り連と合して多く徒歩にて參詣を終り、數日を經て歸村するのである。拔參りをする者は衣服等も平常のまゝで金錢は勿論有たぬが、大概家の息子か娘が拔參りをしたと悟れば、親が衣服旅費を調へて、其

夜宿泊すべき地まで持て行く、若し左なくば旅費は宰領が立替る。

偖何月何日に歸ると云ふ報知が來ると今更のやうに騒ぐ、若者は今日こそと彼是運動して歡迎の準備をする。用意を調へて參詣した者を迎ひに行く、これを酒迎ひと稱し、又迎ひ宿といふを村より一里若くは二里先に設けるのである。この時になれば許した親も許さゝなかつた親も、息子娘のために新調の美服を持て迎ひ宿に行く、若し之を拒めば天罰忽ち至ると言慣はして居る。參詣した者が迎ひ宿に着くと酒宴が始まる、田舍のことゝて物珍らしく見物に來る人が多い。其等には悉く酒肴を饗ひ、參詣者は服裝を換え用意の馬に騎て、意氣揚々と歸村するのである。でこの時の衣服は兎に角三つ紋附を着用することに定つて居る。

馬は平生乘料の爲めに飼てあるのてなく、耕作馬を今日だけ用ゐるのであるが、非常に美々しく盛裝される。これは幾分か他村に對

しての威嚴にも關するのと、一つは今日を晴と思ふからである。この馬の口を取る馬方が何時も苦情を起す原因で、兄弟喧嘩をなすは珍らしくない。馬方は馬一疋に二人を要する、これが何故爭ひを起す原因になるかと云ふに、參詣した者よりも馬方の方が威勢がよいのと、幾分か『いなせ』とか粹なといふ樣子を尊びて、『彼の人は樣子がいゝ』とか何とか娘連の口端に上つて、後々慾望を充たすに好都合であるからと聞たら、誰も何地も女なるかなと歎息せらるゝであらう。

神樣馬と稱せる御幣繪馬を背に乘せたる馬を始めに、順次參詣者か一匹の馬に木で作つた二尺四方許の框を、右と左に二つ載せ二人づゝ乘て行く、それで宰領は馬に乘らぬ。總てが迎ひの宿に着する迄は、徒歩でやつて來るが、迎ひの宿から馬に乘ると大氣焔、聲自慢の伊勢音頭を聲高々と唄ひつゝ、悠然とした調子で道々袋に包む

だ菓子を配つて行く。

村に入ると一層音頭を高く張り歌ひ囃し、其儘氏神に參詣する、こゝで各自一杯の神酒を受け、伊勢屋と云ふに入つて、飯茶碗に濁醪を注ては飲み、注では飲み夜を更かす。この伊勢屋と云ふは闘に當つた者がするので、これ亦非常に名譽として諸人が欲するのである。殊には神樣の御入來とて、軒に注連繩を張り神樣馬が乘せし御幣、槍馬は床に据えて鄭寧に神酒を供へ、翌日氏神に奉納する。

播磨加古庄の亥巳籠

播磨の國加古の庄なる日岡山に、日岡神社とて產婦の神を祀てある。この氏子の年中行事の一として、「亥巳籠」と云ふ習慣がある。夫は毎年陰暦初亥の日（元日が亥の日なれば第二の亥の日）から、巳の日に至るまで七日の間を謂ふので、其前日は籠り中の糧食の準

備を調へる。最初の當日になれば農工商凡て休業し、各家門戸を閉ぢ、刃物庖丁俎板箒口等は嚴重に仕舞ひ又は蓋をし、戸障子の類は開閉に音響を發せぬやうに、布又は紙にて卷き、鋤鍬の類は繩にて堅く縛り、疊の上には澁紙或は毛布を敷き、內庭には莚を延べ、木履は一切穿かず男女共草履を穿ち、大笑大語を戒禁し極て靜肅にして居る。御見舞と稱して毎朝日岡神社へ參詣する外は、一切外出はせない。夜は晩く寢るのであるが、寢ぬる際には必ず燒餅を一つ乃至二つ位宛食る。又夜間厠へゆくと神罰を受けるといつて、無理に我慢して居る。

第四日目を中の宵と稱して、湯にも入り火も焚き刃物も用ゐる。此の日湯に入るのを御相伴と云ふ。且この日は向後三ヶ日の糧食を補ひ、又商工家の耐え難きものは、御祈禱を擧げて許可を受けることもある。當今では大半其例を用ゐるさうだ。

かくして籠中に騷いだり又は火を焚き、刃物を用ひし時は、日岡山が鳴動して、其者は必ず神罰を受くるさうだ。又籠中に出産する者は、親子共に命を絶つと云つて、維新前までは生月が正月に當ると、大に心痛し、其祟を恐れて流産せし者も尠くなかつたさうだ。且の又氏子は大抵籠中に出産のあることはないさうだ。

古は庶人祢は伊勢大御神へ物奉ることは更なり、拜み奉ることも叶はぬ御制なりしを、佛道が根ざしとなりて、拜禮も出來ることとなり、其經代とすべきものをさへ賜りて、家々に齎き奉ることとなりぬ。（玉たすき）

佛事

東京の御會式

毎年十月十三日を『お會式』といつて、法華宗のお有難やの御連中や、また面白半分の似非信者のわい〳〵連が、池上の本門寺と堀の内の妙法寺へ參詣に群集する。信者の講社は東京市中ばかりでも八百八講もあるのであるから、當日は種々の飾萬燈をふり立て、蓼々と閉扇太鼓をたゝきお題目で音頭をとつて、南無妙法蓮華經、どいんがどん〳〵で押出すのは凄じいもので、殊に十二日の夕方からは池上のお籠りと云つて、東京十五區は愚か、郡部または近在より兄哥も嗅も嫁ッ子も婆さんも、とことんやれとん節でも謠うやうに、どんどこどんの太鼓拍子で蟻の行列程出るのだ。其二三日前から是

等の者は宛然氣の觸れたかと思ふやうに騷ぎ散し、左しも宏大な本門寺境内も、萬燈と人間で爪も立たぬ程で、其雜沓の樣はとても筆紙には盡し難いのである。

東京の四萬六千日詣

これも東京に於て行はるゝことで、毎年七月九日十日の兩日は、『觀音の四萬六千日詣』と稱へて各所の觀音へ詣る者が多い、就中淺草觀音が其本場ともいふべきもので兩日とも晝夜繁昌する。其出商人の賣物は重に唐蜀黍と青鬼灯で、唐蜀黍は雷除になるとかて中々に賣れるとは不思議の事だ。殊に誰が云ひ出したか知らぬが此日に參詣すれば、四萬六千日の間參詣した割合に當るとかいふので、今日一日で來世までの義務を果して置かうといふ横着な信心家が多く、後生願の外念のないお婆さん連は申すに及ばず、浮氣まゝりの

娘共が遠方から續々參詣する、又近所の者は納涼がてらに出かけるので夜になると境内はなか〳〵の雜踏である。また例の迷信連は殊更にこの日を擇んでお百度を踏んだり、御神圖を取つたりするから、社壇のあたりは頗る混雜で鳩も豆を拾ふ餘地がなく、呆れて屋根の上で見て居る。

土佐の七ケ所詣

土佐國では四國八十八ヶ所の札所を廻るに換て、七ヶ所の札所に參るを名けて『七ヶ所詣』と云ふ。これは三月二十一二日頃が參詣者の最も多い時である。同日は若き男は赤白等の襷をかけ其兩端を背の眞中に垂れ、又同樣の布にて菅笠の緒を作り頰冠りをなし、笠の上には花又は種々のものを飾り、赤縞などの派手な縞柄の着物を着込んで脚絆草鞋を履き、錫杖又は南天の枝を杖に突きて參詣する

のである。女子は菅笠白手拭の頬冠りで別に異裝はない。こんな異裝をなすに至りしは、今より二十年ばかり以前からであるさうだが、市中の者は斯んな服裝はしない。それで口々に『南無大師遍照金剛』又は『何でも食ひたい偏路の根性』と唱へつゝ、三々伍々隊を成して市中を濶歩するさまは、初めて見る者をして奇異の感を起さしむるのである。

備前西大寺の會陽

西大寺の會陽は中國無雙の壯觀、西大寺村の自慢のものとして人の知る處である。西大寺村は備前上道郡にありて、岡山市の東三里吉井川の河口に枕みたる一村落であるが、金陵山西大寺はこゝにあつて中々の大寺である。緣起は略して會陽當日の一斑を記さう。

陰曆十二月二十七日の深更に、院主たゞ一人一里ばかり離れたる

廣谷山より神木を切り來り、翌二十八日に二人の立會人ありて之を寶木に作る、これぞ幾十萬の信徒をして狂せんばかりに爭はしむる神木なる。正月二日に『牛正西大寺寶印』と印せる紙十二三枚にて之を包み、又串子と云ふ揚子ほどのものがあつて、農家にて之を田畑に立て置けば蟲害を免るとて尊重する。

元日より十三日までは毎日修正會とて、國家安全天下泰平の祈禱をなし、十一日夜より十三日迄地押とて、四方の信者四本柱の間を練り行く。此の四本柱とは太き柱を四方に建たるもので、信者は競ふて此間を通り拔けんとし肉薄して押合ふ。さて當日十四日の夜には、遠近より群集せる數十萬人各裸體となり、寺院の境内立錐の地もなく充滿し、勇々しく押合ふ壯觀は何とも譬へやうがない。又婦人の行とて毎年心願ある者數百人裸體にて髮を被り、白木綿の腰卷にて一つ吉井川に垢離を取り、これも隊伍を組みて四本柱を拔けるのて

ある。

夜の二時頃に一番太鼓二番三番太鼓を打鳴し、三番太鼓の合圖にて堂内の燈火を消し、黑暗々の中に院主は數萬の串牛王を投じ、引續て神木を紙包のまゝ投ぐるのである。幾十萬の信者が狂ふばかりに噪ぎ廻るゝも此神木を拾はんが爲である。而して之を拾ひたる者は群集の中を潛り拔け、神木を納むる家に馳せ行き豫て備へ置きたる桝の内に立つるので、神木を納むる家とは町内の信者にて前以て白行燈を門口にかゝげてある。神木一たび此桝の中に立つ時は之を爭ひ取ることは出來ぬとのことである。納主は直に家僕近隣の人々數十人と、裸體にて家號のつきたる提灯を提げ、寺院に行きて神木の納まりたる由を告ぐるので、此人數は多きを以て名譽としてある。

この通知を得て院主は、其神木の實否を檢するため、長柄の乘物に乘り大蓋先箱の行列にて其家に乘込み、之を檢して眞物に相違なしと認めし上、之を箱に納め金襴の袋に包み暫く祈禱して歸る。此時まで群集の人々は尙神木の納りしを知らず、狂ふが如く爭ひて拾ひ得んと欲するも、寺内城門口に拾主と納主の姓名を記したる角行燈を掲ぐるに及び、始て事濟を悟るのである。

超えて十六日には納主は納め祝として鏡餅米酒等を數臺の車に載せ近隣合壁親族等數百人と花々しく曳き行き、寺院にては拾主を正座に座せしめ、納主其他に酒食を饗し、納主は其後數日間盛宴を張りて知己近隣の人々を招待する。それで拾主には祚一具封金數十乃至百圓、田地若干等隨意に贈物をなし、拾主亦人を招きて宴會を開くのださうだ。これは神木の納つた家は其年大に利得があるとの迷信に基くのである。

伊豫東部死人の祝日

伊豫の東部地方では、毎年舊暦十二月初めの辰の日の夜、其年死亡者のありし家に行き『今晩は御當家には思ひがけなき巳でございましたが、御茶でも御飲みなさいましたか』と挨拶に來るもの多く、又死亡者のあつた家では、其夜近所親類の人々と共に墓所へ行き、餅一つを焙り各自之を裂きて食ひ、翌日の巳の日には又近所親類を招き、餡入りの餅を雜煮として饗應する慣例がある。何時の頃より始まりしかは知らぬが、俗にこの日を『巳』と稱し『死人の祝ひ日』だと云つて居る。

丹波地方の袖米

丹波地方にては死人があると式の如く五七日、六七日とお勤めをして扨七々日の晩になれば、其死んだ佛の子が乞食に出るのである。尤も親に依て四十位な乞食もあれば、まだ十歳にも足らぬ者もある。

それが如何なる歴々の若樣でもお嬢さまでも、其日は乞食として出なければならぬ。昔は隨分見苦しい態をしなければならなかつたさうだが、今ではそれ程嚴ましく云はぬやうになつた。多くは他人の家は愧かしいといふので、ほんの形式的に親類か懇意な所へ出掛て行く。先づ家の内へ入つて『袖米をおくんなさい』とか何とか云つて、又外へ出て待て居ると、佛壇へ供へる茶碗に米を盛て、故意と障子の穴から出してくれる。それを袖口から受けて貰ふのだ、かくして次の家へ行く、斯の如くして三軒以上廻り、其貰つた米を炊いて佛前に供へるのであるさうだ。

琉球諸島の葬儀

一家内誰か死むだ時は、知己親族は心計りの馳走を膳部に載せて其の家に到り、一時は非常に泣きて吊意を表し、夫より墓地に到る

途すがら男子は長いはなを垂れ、女子は布を以て頭より顔を覆ひ、非常に大聲を發して泣き〳〵送るのである。墓所に着けば一時は泣止みて、各自持て來た膳部を墓の前に置き一同燒香をする。それが濟むでから其膳部を各町村の世話人が集めて多人數に分け、其の場に於て食ふので、其狀は內地の仕揚を食ふのに似て居る。食て了つたならば又大聲を發して泣き、それから各自家へ歸るのであるが、萬一其場所で泣き聲の少ない者は同情が少ないとて擯斥されるので出來るだけ大きな聲を出して成るべく長く泣くのであるさうだ。

「アイヌ」種族の葬儀

北海道に於ける『アイヌ』即ち舊土人の葬式の狀況を紹介するも亦一興てあらうと信ずる。彼等は出產婚姻などには重きを置かないやうだが、死者あるときは中々義理堅く萬事を排しても、會長以下少

くも數十名の參列者はある。病者が死に瀕し最早瞑目せんとすると、其家から部落の各家へ回報する。この回報に接すれば、各戸より一人或は二人老若男女の別なく、苟くも差支なき限りは病家を往訪する、其內子供は過半數であるが、屋根に上るものもあれば庭に立て居るものもある。嬰て病者の絕息と共に多數の泣聲は屋外に洩れて盡尙凄い光景であつたが、口々に泣きつゝ『けのけのはーほー』『けのけのほーほー』なる言葉を繰返して居る。是れは何の爲であるかと云ふに、彼等が死者に對する唯一の祈禱であるさうだ。夫れから死者に供へし菓子等は參集せる子供に分ち與へ、男子は酒を購ひ來たりて爐邊に圓座し左も愉快氣に盃を巡し、女子は馬鈴薯を煮且つ米を以て團子を作りて食ひ、男女小兒共に美食に飽き喜悅滿々たるに引替へ、食中婦女は時々涙を流し、片手に食器を持ちしまゝ『けのけのはーほー』を祈唱するのみて、其心より悲しむは家族の

みに過ぎぬ、他は所謂虚禮なるものである。此時この家の狀態は寧ろ呆れるの外はない、中にも男子等は飲酒に陶然と醉をなし、得意の神居唄や渡島節追分唄などを呻り出すなどの滑稽もある。彼等の死者の家に集合するは悲むの同情ではなくて、飲食の快を貪にあるかを疑はしむるのである。

葬儀は死せし翌日を以て行ふので、夜間は內地の通夜の如く、近隣の人多數宿泊し且つ祈禱するのであるが、愈葬式に至れば會長初め異樣の陣羽織を着用し、何れも跣足で參列するので、其遺骸を墓地に運ぶべく棺を舁ぎ出せば、參列者の大聲にて悲み泣く聲は部落の隅々までも聞え渡つて、如何にも悲慘の感じがする。家を出づること十數間にして、會長は大聲を張上げて會葬者に『死者の爲めに最早泣くな』と制する、この會長の叱聲は「アイヌ」の葬儀の嚴式であるさうだ。この式制を聞けば今迄の泣聲は話聲となり、夫れも

程なく止みて後は無言となる。

墓地に達すれば、會長先づ進みて死者に袂別の祈禱をなし、夫より順次に手を上げ下げして拜禮をなし、土葬に終るを常とする。「アイヌ」人の死後葬儀にいたる迄二日間の光景は、眞に奇異の思ひを起さしむる。

宅中に先祖の靈を祀るは、禮記王制に、庶人祭於寢、註に適寢とありて正堂の事なり、今いふ座敷の類なり。本朝にては、上下おしなべて宅中に佛壇を設き、先祖の靈を祭る事常なり。禁中御佛壇の事は、遠碧軒記上卷居所部に見ゆ。（松屋筆記）

祈願

東京の寒垢離

東京では『寒詣』と稱へて、毎年寒中に神佛へ夜詣をするものがある。これは大工建具屋鍛冶屋鐵葉職と云ふやうな職人に限る事で、就中大工が多いさうだ。何れも廿歳前後の血氣な者で中には十二三から十五六の小僧も交つて居る。其扮裝は白木綿の單衣一枚に同じく白の三尺帶、白の後鬢卷に素跣足。但見る幽靈の敵討といひさうな扮裝で、手には印附の弓張提灯をさげ、腰には鐸をぶら下げ、歩む度にチリン〳〵と鳴らしながら、思ひ〳〵に神佛の社に參詣する。寒月高く冴えて大路の霜に軋る下駄の音遠く聞ゆる夕、斯のチリンチリンの音を聞くと、夜の寒さが一入身に泌むやうに覺えるが、寒

詣をすれば伎倆が上達するといふ迷信と、一つは血氣熾の我武者の勢と、これに幾分かの道樂氣が加はつて、信心半分面白半分に若い連中は毎晩のやうに驅け出す。中には晝間出かけるものもあるが、十に八九は點燈頃から宅を出て、十時十一時頃に引上げるのが多い。其行先は思ひ〳〵で一定せぬが、多くは各所の不動堂である。兎に角路の遠近を問はず、寒三十日の間夜風に吹晒されて威勢よく馳廻る勇氣は、怖しけれと云ふの外はない。

この連中が目指す處へ驅付て何をするかと云ふと、先づ社前に額づいて祈念を凝らした後、水垢離といふ難行苦行にとりかゝる。親や夫の病氣平癒を禱る爲に孝子貞婦が水垢離を取るといふ事は、演劇や草雙紙で見るばかりと思ひの外、明治の今日に寒中水行と云ふ文覺流の荒行の迷信連の多いには驚くの外はない。現に深川の不動堂の水行場などでは、一夜に三百人乃至五百人はあるさうだ。何れ

も素裸になつて水行場の冷たい石壁の上に跪き、車井戸の水を汲むが早いが、猶豫もなく腦天からざぶりと浴びる。これが終ると身體を拭き舊の行衣一枚で顔へながら驅出すので、時には其中に妙齡の娘なども見受けるといふが、これは如何なる御心願の筋か知らねど、「寒垢離や肌生白き哀さよ」の句も偲ばれて、哀れといはうか、馬鹿々々しいと云はうか。

上野前橋の六算

上野の前橋市中に古來傳へ來りし『六算』と稱する奇異なる禁厭がある。それは病者が身體の內何れの部分にても疼痛或は苦痛を感ずる時は、忽ち神宮司廳に走行き、之が拂除を乞ふと、神官は先づ其年齡を問ひ、其現年齡より減じ得らるゝだけ最も多くの九を減じ、殘餘の數を九星表の如き表に比較する。此表には一又は三は足部と

か五又は七は肩とかいふやうに書てある。疾病苦痛の場所が之に適合すれば六算と稱し之が除を行ふ、即ち六算除けである。それで六算に表六算、裏六算とあつて、殘餘の數なき時は總身六算と稱する。此六算除とは一枚の神名か何かを封じたる御札で、表に『六算除神璽』と記し、之を病者の上に當る天井板棟梁等に貼附し置くのである。往々之を信じて鬼籍に列するものも澤山あるとか。これは市中に限りて行はれ近鄕には少いやうである。

備前兒島地方の裸體詣

備前兒島の中央なる山嶺に瑜迦と云ふ小さな町がある。こゝに鎭座ます由加神社は、兒島郡一圓の大產土の神とも云ふべき格で有るので、郡中にては頻死の大患者があるとか他に變災等のある毎に、醫藥より神の保護を仰ぐこそ靈驗著しとなし、其隣家若くは村

内の血氣の若者等所謂勢祈禱として、各々裸體跣足となり手に鈴を打振り、口に法螺貝を吹鳴らしつゝ、少くも數十人一團となつて參詣するのだが、流石は廣き郡内の事として毎日毎夜此裸體參りの絶間がないくらゐだ。中にも奇怪なるはヤレ賭博で捕はれたと云つては無罪を祈り、今日は徴兵の檢査日なりとて眼中更に國家の觀念なき僻輩が、合格せぬやうにと裸體參りをするなど、祈願を受くる神樣こそ飛んだ迷惑だらう。

淡路岩谷の裸體詣

淡路國岩屋町は、北には有名なる松尾崎の燈臺あり、一葦水を隔てゝ、播磨國明石町に對し、東北は須磨舞子より兵庫和田岬を望み、西は小岳を負ひ繪島は近く海上に浮びて、須磨明石にも讓らぬ景致がある。この町にて危篤の病者のある時は、隣保知己朋友等相集り

犢鼻褌一つとなり、前列に小供を立たしめ大人は其後に從ひ數十人隊を組み、日沒後自家の印を附せる提灯を携へ、氏神の方に向ひて脇目もふらず一目散に、各々『已れが先き、已が先き』と喧呼しつつ街路を疾走するのである。而して病家にては神主先生鹿爪らしく神前に燈明を點じ、烏帽子裝束式の如く高天ヶ原を唱ふるのである。裸體の一隊は神社に詣り、各々病者の平癒せんことを祈り、歸路はもとの如く隊を組み靜に裏道より病者の家に歸るのである。

駿河蒲原地方の凝揚

駿河國蒲原町附近の村落には、往昔より『凝揚』と稱する妙な神詣りがあつて、今も尙依然として行はれてある。夫は村内に頻死の大患者のある時は、醫藥よりも神の御助けを仰がんとて、血氣の若者等は毎夜素裸躰素跣足、各自提灯を携へて一列となり、先づ海岸

に到りて身體を淨め、先達の者海水を汲み上げ來りて之を神前に供へ、一同拍手三拜して額けば、嚮て村の禰宜殿は衣冠を正し手に中啓を握り、しかつめらしく勿體をつくり何やら祈誓を凝し、前の海水を恭しく捧げ神慮に適ひしとて先達に渡す、これにて凝揚の式は濟み一同神前を退き、先達は病家に行き神水なりと稱へて病者に與へるのであるが、これ等が迷信の極であらう。又甚だしきは村内に適齢者あれば合格せぬやうにとて、例の凝揚の式を行ふ者もある、神樣こそ飛んだ迷惑、餘所目には馬鹿々々しくて堪らぬ。

羽前山形の厄落し

山形市旅籠町の湯殿山神社、十日町の市神社の神前で毎年陰暦正月十日に、厄年に當る人が自分の年齢の數だけ、例へば二十五歳になる人は二十五文、四十二歳になる人は四十二文といふやうに、年

の數だけ錢を撒いて厄避けの呪をする。之を『厄落し』と稱するのて、昔時はなか〳〵盛んであつたさうだが、今はだん〳〵衰へて來た。それで之を拾ふものは俗に泥子と云つて、前田村久萬林あたりの貧民が、破れ袢天に股引で、オイタ〳〵と叫びながら互に押し合ひへし合ひ、轉んだり轉ばされたり、全身泥塗れになつて撒く錢を拾ふのであるから、喧嘩口論止む時無しである。一般の迷信として此拾つた錢は、火防の呪ひになると云ふので、この錢を拾へば喜むて持ち歸り、爐の鈎に下げて置く。また拾はぬ者は泥子に幾何か割をやつて、拾ふた錢を讓與つて貰うのであるさうだ。

志摩御座の厄落し

志摩國の西南端なる半島形の所に、御座と云ふ戸數僅に二百ばかりの小村があるが、此處の初午祭りの日に『厄落』といふ奇習があ

る。何處でも同じことだが男子は二十五歳、四十二歳、女は十九歳、三十三歳は厄年としてある。それでこの地方はこの日に厄を落して了ふのだと云ふて、少しでも財産のある者は、四五日前より村中へ盆大の餅を配布して厄を分ち、亦樽開きと云ふて村民を招待して大酒宴を催す。さて明くれば初午の當日と云ふ前夜は、其年厄に當れる人々は、厄餅とて別に作つた餅を小脇に抱へ、提灯を持てる小供を先きに立て村社に詣ずる。途中四ッ辻の處へ來ると持參せし餅を落し、これで本年の厄拂ひ、厄を落したといふて平然と後を見ず家に歸り、更に亦酒宴を開くのであるさうだ。

備前瑜迦地方の厄病神攘ひ

備前國兒島郡瑜迦地方では、毎年陰暦六月一日厄病神を攘ふのだと云つて、土地の若者等打集ひ、蓮臺寺から三四丈もある大珠數を

取出し、各々輪になつて取縋りつゝ、鬨の聲を揚ぐると等しく、一軒毎に跳足のまゝ飛上りて、家も搖ぐばかりの大騒ぎを行らかすのだが、この間に小娘でも見附くれば直樣馳せ寄つて、卷き倒すものだから、當日は藏の内や押入に隱れて居て、中々容易には出て來ない。又平常人に憎まれ居る家などはかゝる時を好機として、亂暴を働かれるのである。

大和櫟本地方の雨乞ひ

大和國添上郡櫟本地方の雨乞ひは隨分異つたことをやる。十二三歳から二十歳前後の男が眞裸躰で、高さ四尺位な龍王明神の祠を擔ひ、「龍王さんぢや水かけ、龍王さんぢや水かけ」と云ひながら、町中を擔ぎ廻るので、擔人は十四五人てあつて。夕方から始める。さうすると町内では家毎に柄杓、桶、盥、バケツなんどにて祠と擔

人との別なく、水を浴せかけるのだ。彌次馬連は之を見んとて同じく『龍王さんぢや水かけ』とて大聲に呼びつゝ行くと、慌者の丁稚などが本物と見物人と間違へて、濁水をぶつかける珍事を惹起すことが度々ある。かくすること三四日にして、まだ雨が降らなければ、炬火の火ふりといふのをするが、これは楪本八百戸ばかりで、各自一軒に一本乃至二本の炬火を作る。其製法は竹、麥稈、種木、豆木等を集めて長さ二間乃至二間半、太さ二三尺のものを屈強の若者が夕方から擔いて、氏神の境内の廣場に集まるので、神官が其人數の揃つた頃に一點の切火を打てば、皆々我先きにと其炬火に火を點じ、各自それを荷ふて田間の細道を傳ふて一列に進み、領地の最遠周圍を巡るので。これは北巡り、南巡りと二晩續けて行るのである。

楪本は七垣内に分れてあつて、雨乞には一垣内に太鼓一つ、鉦五つ六つ、高張提灯一つ、弓張提灯三四づゝ出るので、

雨たんもれ、たんもれや、雲に、しるけが、ないのんか。

と口々に唱へ、太鼓と鉦とは之に和して敲くのである。

これでも降らぬときは又提灯の火ぶりを行るが、これは各自好きな提灯を竿の先にくゝり付け、同じく氏神境内に集まるので、太鼓や鉦は變らぬが、提灯であるから危險なこともないので、女や小供も混つて行く、それで其竿の長さは各自勝手であるから、兄弟差荷ひにして行くものもあれば、十間餘のものを押し立てゝ行くものもある。或は高く或は低く或は大或は小、色もさまゝで二千二三百の提灯が細き道を一列に進むのであるから、なかゝの美觀である。從て楪本の火ふりと云へば、隨分遠方から見物に來る。これも二日間續けて行る。

しかし一日行つて雨が降れば、二日目は止めて、御禮にとて氏神に參詣し、農家の者は御籠りと云ふて、社に徹夜するのである。

又雲やぶりと云つて山の頂で、炬火の代りに薪一千貫目ばかり一度に燃すこともある。これもなかなかの觀物ださうだ。

駿河三日市場の雨乞ひ

此雨乞は八月頃旱魃に、駿河國富士郡加島村三日市場に鎮座まします、木花咲耶姫を祀れる富士六所淺間神社で行ふので、村の者は通知に依て此神社の拜殿に集合する。先づ神前に供物を獻じ神官が祝詞を奏して後、村の者二百人位本社の周圍に群集し、太鼓を鳴し鉦を打ち一齊に「あーめー、降らせたんまひな、天地ケ嶽の黑雲」と唱へつゝ廻るので、鉦鼓の音と人の聲と相和し木だまに響いて中々喧しい、斯くする事百回にして全く祈りを終るので、此雨乞を行ふと雨三日の内には必ず降雨がある、降雨があると赤飯を蒸して祝し社へ御禮參りをする。若し祈つてから三日の内にお濕りがないと

再度の雨乞を行ふ、此度は社前の高麗狛を擔ぎ出して池に投じ水を浴せるので、この二回の祈りを終れば其夜必ず篠突く雨が降るさうだ。其處で高麗狛を池から引上げ元の社前に据え、御禮だと云ふて其日は皆拜殿へお籠りをする。

上野榛名附近の雹追ひ雷追ひ

上野國榛名山附近の村落では、往昔から夏時降雹又は雷鳴を催ふし來たるとき、鳴物を盛んに囃立てゝ之を追へば、降雹忽ち他に去り、雷鳴立所に止むと言慣はして居るので、夏季に方り一天俄に搔曇りて降雹迸り、若くは雷鳴轟き渡れば、村民等は老若男女の別なく、何れも打揃ふて戸外に立ち、鉦や太鼓を打敲き拍子木を打つもあれば、銅羅を鳴らすもあり、甚だしきは金盥などを叩くもあつて各自思ひ〳〵に有ゆる音のするものを取出し來たり、騒がしく囃し

立てながら『おい〳〵』と呼はりつゝ、此處彼處を馳せ廻るを名づけて『雷追ひ』又は『雷追ひ』と稱し、今に之を行ひ居るとのことである。左ればこの風習を知らぬ他地方の人が、偶々この騒ぎを見るときは、如何なる椿事が出來したのかと、驚くことは屢々あるさうだ。

神祇を拜し祈禱すること、これ我國の風習にして、今其例證を挙ぐるに及ばず。人窮すれば本に反るなど漢人も云へる如く、天に號泣し父母に訴ふるは、皆これ人情の切なるところより出るものにて、神祇に祈ることも亦此意に外ならず。

（石原正明）

商工

東京の「べつたら」市

東京市の日本橋通旅籠町人形町小傳馬町通油町へかけて、往來に大根の淺漬澤庵漬の店が出る、これは毎年十月十九日で俗に『べつたら市』と云ふ。これを賣るのは何れも屈強な若者で、向鉢巻襷掛けの扮裝威勢よく『さア入らつしやい〳〵、廉くツて旨いの』と聲を嗄らして客を呼ぶ。其大根の價は普通は一本二三錢から七八錢だが、客は早朝から夜に入るまで店前に群集して、爭ひて之を買ふことは不思議と云ても可いくらゐだ。その淺漬や澤庵大根は何も露出しのまゝで繩に縛り、男も女もこれを引下て歸る。若しこれが平日であれば、絲織の小袖を着た立派な商人や、高島田に結ふた妙齢の

娘などが、淺濱澤庵を露出でぶら下げて、加之も日本橋區の大通を白晝往來すると云ふ事は、とても思ひ寄らぬことである。此日に限つては人も怪まず、我も耻しからず平氣で之を提げて、押つ返しつ往來して居るのは、實に一種の奇觀である。殊に夜に入ると其雜沓は甚だしいもので、又其混雜の中で小兒や生醉が右の澤庵をぶら下げ、わざと婦女の傍へ寄て『べつたら〳〵』と振廻すから、婦人連は大狼狽でキャッ〳〵と云つて逃廻る。又これを面白半分に追ひ廻すと云ふ隨分殺風景を演ずるから、混雜の上にいよ〳〵混雜をかさねて、警官も殆ど制し切れぬ位だ。何故又こんな騷ぎをしてこの市へ行くかと云ふと、別に仔細もなく彼の商人の口上通り、此日に賣る淺濱澤庵は麁くて旨いと云ふに過ない。要するにこれも一種の習慣で、たゞ何がなしに年々買ひに行くのを例とするからであらう。

この日は右の大根の外に夷講の設備として、土製木製の夷大黑や、

打出の小槌、又は懸鯛を賣る店もある。これ等も中々に捌口がある市が東京に於ける歳の市の始めである。

尾張一の宮の市場

『伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ、尾張名古屋は城でもつ』と唄はるゝ、名古屋市金鱗城下の西北五里にして、人口一萬五千戸數四千餘を有する小都會がある。之を中島郡一の宮町といふ。

この一の宮町には毎月三八の六次に市場を開くので有名なものである。武州八王子其他にも隨分名高い市もあるが、此市には又一種獨特な長所があつて、恐らく世に有りとあらゆる物を賣て居る。實にこの市に露出せられて居ないものは無いと云つても過言ではない。或人は一の宮の市には猫の兒まで賣て居るとて感心したと云

ふが、これて其一班を窺ふことが出來やう。機業の盛んな土地で尾張物産織物の本場と目せられて居る。住民は一般に機敏であるが、それも最早通越して狡猾になつて了つて、近國の人は『一の宮の鴉』と稱し、非常に嫌つて居る。

土佐の裸體商人

土佐國では年々の夏商家の店に座つて居る番頭でも小僧でも、衣物は大概きびらとて、木の皮にて製せし黄色の帷子のやうな物で作つた褌神に、腰卷をして居る。褌神は胸部に紐があるが、兩腕及び腰部から下は全然露出しである。他國の人などが見たら一寸可笑しく思ふ。それで買物に客が來て歸る時客の方で、『有り難うございました』といふと、番頭小僧は『大きに』と返事をする。

羽前山形の納豆賣

羽前の山形では男子十二三歳に至れば、商業見習ひのため他家へ奉公せしむるか、さなくば納豆賣を營ましむるのであるが、納豆賣になる方が多いさうだ。この納豆賣は毎日朝夕二度づゝ市内を廻るので、納豆は藁の苞入で一個が金六厘である。一度に拾數個を仕入れて『納豆はいら、小豆納豆はいら』と叫びつゝ賣り歩く。最初は親類縁者を始め懇意の家に行くが、二三日の中は母又は友人に案内を頼むものもある。納豆汁、納豆餅はこの地方の好物であるから、忽ち賣り盡して了ふ。其利益は日々積み置き銀行又は縁家に預けて、利子を計算し增殖を計り、丁年に至つて何か商賣をなす資本に充てるので、大抵丁年まではこの業を營むで居る。

長門安岡の肴賣

安岡の肴賣と云ふは稀な營業で、其風俗は恰も京都の八瀬大原から出て來る、俗に大原女と云ふのに酷く似て居る。四斗樽を四ッ切にした程の盥へ種々の魚類を入れて頭へ載て來る、其重量は五六貫目あるさうだが平氣なものだ。其觸れ聲が可笑い、季節々々で魚は變るけれども一例を擧ぐれば『鯛買へ、鯖買へ』の類で全然命令的である。其横柄なところは、如何に元は平家の落武者であつたらうと昔が偲ばれる。既に安岡の漁夫は一般に平家の郎黨が、壇の浦を落延びたといふ事を下關の市人は許して居る。里程は下關から二里ばかりの在方で、毎日重荷を頭に戴きつゝ二回くらゐ往來して平氣の平左だ。それで懸値は甚だしいもので、一圓と云つた物なら二十錢か三十錢には請合負ける。夫は海上で漁するのみで、販賣は一切女子の專業である。

越後の縮布晒し

越後國には晒屋とてこれのみを業とするものがある。其家の邊又は程よき所を見立て其處に假小屋を造り、物を置き又は休息所に充つるのである。晒人は男女共に打交り身を清めて晒すは、毎年正月より二月中旬へかけての職業である。此頃は未だ田も畑も平一面の雪の上であるから、田畑の上を晒し場とする者もある。日の内に晒場を踏みへしたる處あれば、手頃の板に柄を付けたるものにて雪の上を平かにして置く、斯くせざれは夜の間に凍りつきて、踏へしたる處が其儘岩のやうになるからである。それで白縮布は織下したるまゝて晒し、他の縮布は糸に造りたるを枵にかけて晒すのである。その枵は細き丸竹を三四尺程の弓となし弦に糸をかけ、枵ながら竿

にかけて晒すのである。白縮布は平地の雪の上にも晒し、又高さ三尺餘り長さは布ほど横巾は勝手に任せ、土手のやうに雪にて造り其上に縮布をのばし並べて晒すもある。これは狗などが踏越て汚すことがあるからださうだ。また枡を並べて晒すもあつて皆其場所の便利に從ふゆへに一定して居らない。晒しやうは縮布にもあれ糸にもあれ、一夜灰汁に浸し、置き明朝水にて幾度も洗ひ、絞り上げて前の如く晒すのである。貴重尊用の縮布を晒すのは是等とは異なつて、別に晒場を設け萬事注意して晒すのであるさうだ。かく灰汁に浸しては晒し毎日同じことをなして、幾日かを經て白々となしたる後晒し終るのである。この晒してある所へ朝日の赫々とのぼりて、玉屑平上に列ねたる水晶白布に紅映したる景色は、譬ふるに物なき美觀て、かゝる光景は雪に稀なる暖國にては、到底見るを得ざるものである。

農事

尾張熱田の花の橈

尾張國熱田町に鎮座ます熱田神宮に於て、毎年陰曆四月八日『花の橈』といふ行事がある。それは下馬橋門内に神宮が、米作と棉作とに關する二種の作物をして置くを、近郷から出て來る百姓連が見て、其年の米と棉との豐凶を卜するのである。其作り物は毎年一定して居ないが、例を擧げて見れば、米の方は稻田を見せて其處に鍬を持ちて百姓が立ち、彼方では二三人稻を扱て居る、其傍には倉庫を開て前に米俵を擔いで一人の男が立て居る。又棉の方は棉畑を見せ男女兩人が之を收穫して居り、其一方には棉を運んで居る。これを見た百姓連には悲觀派と樂觀派とあつて、其評定が實に面白

い。樂觀派は棉に對して夫婦共稼で收穫をして居るから、豐作に違ひないと云ひ、悲觀派はいや然うではない夫婦共出て迄して急いで收穫して居るのは、暴風雨の虞れがあるからで、殊に棉の幹の延び過ぎは雨が多い驗であると答へ、又悲觀派の米に對する觀察は、鎌を持ちながら立て居るのは刈入を躊躇して居るもので倉庫を開て居るのは凶年故米を賣出すのだといへば、樂觀派は否倉庫を開いて居るのは米を積込むので、其證據には一方に於て既に稻を扱て居るなど、何れにしても側目から見ると長閑氣な噂をして居るやうだが、この評定の結果によつて大に人氣に關するのは怖ろしいもので、夫れだけに農家はこの『花の榛』に重きを置くので、近在からの人出多く、熱田の賑ふことは他の祭りに超えて居る。

駿河地方の鍬初め

駿河地方では正月二日を『鍬初』といつて、一家の主人は朝早く起きて身を淨め、氏神に詣てゝ後、其年の苗代場となすべき田地の中央に、あさの方を向いて土を小高く三ケ所に積み、これに四五尺の青枝を立て注連繩を張り、其根に燒餅二ヶ切づゝを置き、右側を早稻、中央を中稻、左を晩稻と定めて、これを烏が來てその餅を食ふのを待て居る。第一番に早稻と定めてある場所に烏が來れば、其年は早稻の豐作を知り、又中稻に來れば中稻、晩稻に來れば晩稻の豐作をトすると云ふ一種の占をやるのである。

羽前山形地方の稼初め

羽前國山形地方近在の農家で毎年陰曆正月十一日に行はるゝ俗習である。此日の黎明に一家の男子は打揃ふて野良稼ぎに赴く打扮をなし、肥料に用ゐる秩芻を束ねて背負ひ隊伍をつくりて、いく

と聲を擧げながら、惠方に向へる田に走り行きて之を拋げ散らし、歸りて後餅を燔りて啖ふのである。俗に之を『稼穡初』と稱へ餅を啖へば力を倍すと云ひ傳へて居る。

是れも同地方の農家に行はるゝ奇習で、正月十五日の朝交讓木の枝に團子を刺し餅花を造りて之を鴨居に懸け、團子を茹たる汁を手桶に汲みとりて一人之を持ち、他の一人は鉈を携へて共に園に入り鉈を持ちたる人は冬枯の樹に向つて『なるかならぬか、なら、ざら鉈もて打切り申すぞ』と喚びつゝ、鉈を振上げて少し宛幹を切ると、手桶を携へた者が聲に應じて『なり申す〳〵』と呼びながら、團子の茹汁を其切口に濺ぎかけ、此くして一樹毎に切り廻るのである。これは果實を多く熟らしむる禁厭ださうだ。

信濃北部地方の木棉玉

木棉玉とは信濃の北部地方の田家で毎年一月十五日に行ふ古例である。先づ柳の枝の程よきを伐り取り、米の粉を練り木棉の花或は實の形などを手際よく拵へ、柳の枝の先に刺し天井より之を吊し、室内を飾るのであるが、これは一年の木棉の豐作を祈る意であるとか、そして下から之を見上げ其手際を評して笑ふのである。近來は木棉の花の形は大にすたれて、八九分は繭の形となつたさうだ要之養蠶業熱心の結果であらう。之を飾ること五日間、二十日の朝になると家内競ふて之を取り下ろすので、その最も大きく分捕するを手柄とするのである。

陸奥八戸の「いぶり」

陰暦正月十五日『親母ア、苗取や來た餅やるべいか、飯米やるべいか。』『爺も婆も明日ア十六日だ。八の戸さ、いぶり見に行くべい

な』と、老幼男女の別なく盛装して見物する習慣がある。此の『いぶり』と云ふは、百姓が豊年を祭るのであつて、耕作の真似をするのである。先づ十五日には苗取といつて、村々の若者五六人多くは十二三人、笛大鼓手平鉦等で、戸毎に『ヤイ〳〵此家の旦那様の苗はよい苗だ〳〵』と云ふて、組内の三四人が藁の小束を右手に握つて腰を屈め苗を取る真似をするのであつて。其囃しは、

『取りませう、〳〵、苗を取りませう、コポ〳〵、タン〳〵、きりッとやつて置てやれ。

コポ、タンは水音である。キリットは束る様、斯く二三度して今度は其数を数へるのである。『一ッ三ッ九ッ三百五百、おヲ取つた〳〵千三十八取つた、其方何程取つたけア、吾ア三千十百サ、今度は鳴様の貯田取るべイ』と又々初め終つて亭主と鳴から餅、飯米、錢のやうな物を貰ふのである。

翌十六日には若者共三十、組位で華美な着物て、二尺位の竹に雑色の紙を張りたるを持ち、天下泰平何村安全の旗を立てゝ、太鼓、笛、手平鉦にて打囃しつゝ、近傍の町村を田植と稱じて歩行くのが『いぶり』である。組内の三人は大きな烏帽子に夷美須、大黒、松竹梅鶴亀など彩色したるものを冠り、着物は縞縮緬にて腰切のもの、手には三尺棒に鈴を附けたるを持ち他の者は之を取まき、何やら歌へば『いさ〳〵』と云ふて、頭を振り鈴を鳴らして舞ふのである。その次には赤い頭巾を冠つた舞手は『何を舞うたら宜しかろー、大黒舞と囃せのウ』と云ふて、鼻を動かし口を曲げ目を細くするので中々可笑いのてある。その次は三味線太鼓で追分とか都々逸を踊る次には茶番狂言である。先づ是て役目は濟み、戸主は皆々大きに御苦労であつたと、飯米や錢を與つて、澤山馳走するのである。

阿波川田の「のた」打ち

阿波國麻植郡川田村にては、何れの時代より起りし習慣なるやは知らざれど、例年田植の始まりて村の乙女の衣裳着飾りて出る頃には、處々に『のた打』と稱して田の中の粘泥を通行人に投げ附くるのである。朝より精出して植え午後四時頃に終るや、知人と否とを問はず男女を擇ばず、乙女は手に〳〵泥を握れるだけ握つて打つけるから、若者等は面白がつて態と立派に身拵へをして出掛けて行けば、娘等はこれを待ち受け『それお祝ひ』と聲かけて、共々に兩手に前垂に泥を持ち、投げつけ〳〵雨霰と追ひ行くさま可笑しく、赤き帶白き足のぢら〳〵見ゆる中々に風情なきにしもあらず、逃ぐる跫音笑ふ聲一場の滑稽劇である。又物好きの連中は之を見物せんとて、遠かの所に場所を定めて群がり集まるも亦奇觀である。

安藝吉田地方の田植祝ひ

安藝の廣島市を距る約十里の處に、吉田と云ふ人口四千二三百位を有する小市街がある。今より殆んど四百年前、中國を席捲したる毛利元就の生れ故郷で、山中には珍らしく開けて居る。

この吉田附近に行なはるゝ田植祝ひは、他地方に其例を見ないのである。そは田植をするには一字づゝ協同して、一日づゝ行なふので、毎年六月七八日頃より始めて二十四五日頃に終る、其日取は以前に會合して定めて置く。さて其當日になると、番に當て居る家では朝未明に起き出てゝ、それ〳〵の準備をする。若し豪農で多くの田地を有せるものならば、從つて多人數の者が手傳に來るから、前日より賄者を二三人雇ひ入れてある、これをおんなりといふ。

田植の始まる前に、このおんなりが、苗代の苗の上に、長一尺

四五寸位に切つた藁を散布する、これは拔取た苗を束ねる爲で、暫くすると、隣近所一字の婆娘妻君等が、ぞろ〳〵と着物を膝のあたりまで引上げて、跣足のまゝやつて來て、苗代に入つて苗を取始むる。この苗を取り又は植える女を早乙女といふので、名は大分御立派で詩的であるが、名實相反するから恐入る。一方では鋤たる水田に牛を入れて、これに馬秣を引かしめ搔田となして、苗を植え易からしむるのである。この牛に乘せる鞍は朱塗或は黑塗で、金色の自家の定紋を附してある。中には花鳥其他の模樣を彫り刻んで、種々の彩色を施して美麗に飾り立たのがある。且つ又之に枝垂櫻、柳、或は牡丹等の造花を立てゝ、互に美を競ふので、それが數十列をなして往復する所は實に美觀である。而して此等數十の先導として、先頭に進むは甚だ困難であるさうだ。其田一面平等に搔廻つて、次第に從ひ來る數十の牛をして、各々衝突の患ないやうに、注意に注

意をしてやらねばならぬ。されば此の役は老功の者でなければ、務まらぬのである。かくて苗を植えるに差間なきやうに搔立てゝ、次の田に移るのだ。茲に又苗持といふ者があつて、これは早乙女の取た苗を搔田に運んで、植へるに過不足のなきやうに、見計つて配附する役である。一々田の中に持行くは面倒だから、此方の畔から束ねたのを投るのであるが、多年の熟練で平等に配置が出來る。これが濟むと、早乙女は搔田の一方に、一列に後向きに並で、配置せられたる苗束を分ち植うるのである。

それてこの稻の豐熟を祈るのと、一つは早乙女は朝から夕まで、食事の外は間斷なく、十數日間たゞ此事ばかりに、從事するのであるから、これを慰さめむためとより、囃手があつて、苗取のときは早乙女の後方、植えるときは早乙女の前方、即ち植えた中を辿りて音頭を取るのである。囃手は常に早乙女の前方に一列に列んで、歌

に連れて囃すので、勿論早乙女は後方に〳〵遅ひ下るのである。

この囃手は、大太鼓として直徑二尺五寸長さ三尺位の太鼓を、横しまに腹につるしたものと、小太鼓として通常の太鼓を縱につるしたものと、横笛および手打金又は手拍子として、銅又は鐵製の拍子を打つ物から成立して居る。これに音頭なる者があつて、此の人は手に「さゝら」と稱する、直徑二寸長さ一尺位の竹の、一方に節を有し、節なき方を十六に割れるものを、左右に一本づゝ持ち之を打合はして、ガチャ〳〵と音を立てゝ、音頭を取るのである。又大太鼓を打つには、拍子と名けて大抵檜の木にて、長さ一尺四五寸、中央を細く削り兩端に、眞白に晒せる馬又は羊等の長毛を附せるものにて、曲をなしつゝ打つのであるから、これが數十も列んだところは壯觀なものだ。故に一郡或は一鄕に名の著はれた豪農の田植には、數里を遠しとせずして、腰辨當で見物に出かける。又拍子のまはし方の巧

なる者は、其曲を誇らんがために、態々遠方から出掛るものもある。

又歌は音頭が始めで、之に對するものを早乙女が歌ひ、終ると囃手が一同唸り出し、次に早乙女が歌ひ始めると同時に、樂奏が始まるので、凡そ五分間位で中休がある、之をこしにするといふ。此間音頭と早乙女は、かたみ代りに同じ歌を繰返すのであるが、又常に歌を變る處もある。この時は無論音頭と早乙女と代る〳〵唄ひ、囃手は無言のまゝ奏するのである。休憩一分間位で音頭の唱ふる歌に連れて、こしにして居た早乙女は、又屈んで植へ始めるのである、この音頭は歌ふのみでなく、囃の緩急、苗の植へ方等をも監督するのだから、老功者でなければ出來ない役だ。

歌は淫猥極まるのが多いので、習慣とは云へ親子姉妹相携へて、苗を取り或は植へつゝあつても、平氣の平左て拍子を合せて歌つて居る。然し中には優美なのもある。今一二を記さんに、

音頭『さーのふ、今日まじや良い友達、今日は殿御取ーられてーイ。

早乙女『裏の山の、青柴ーが、燃へたつ程に、おーもへど。

又歴史的のもある。

音頭『穏戸の瀬戸を、切ーり抜く、きーよもーりてーそはのーイ。

早乙女『日の丸のー、おーぎで、お日を招ぎ、もーどいた。

又少し節の異つたのもある。

音頭『さーんばぇーはア、どーちから、見ーえしまーすウ、宮の方から、

早乙女『宮の方からやーハレ、あーし毛のてーまに、手綱よりかけ、

参拝さんとは、稲の守本尊とて尊んで居る神様のことである。又早乙女の方のみが異つたのもある。

音頭『鞍ン殿〳〵、京で何を習ふたアイ、

早乙女『一にや太鼓、二にや笛、三にやさゝら手拍子、さゝらばちの

かよふ程、物を書き習ふた。

總て是等の歌は、其歌ふ時が定つて居るので、朝、晝、夕に區劃れてある。例へば朝歌ふのは、

音頭『今朝田へ降りるとき、殿に物を言ふたかのーイ。

早乙女『霧は深し、殿は見えず、なんで物を言はふにやよ。

晝歌ふのは、

音頭『晝間のところて、おんなりを見たかのーイ。

早乙女『年は二十一ンぢやが、まだ、鐵漿をつけんよ。

又夕歌ふのは、

音頭『日ぐれ方の、早乙女と、人の小娘はのーイ。

早乙女『惜んでも惜まれぬ、人の小娘はよー。

これ等は其意が解るけれども、歌によつては少しも解らないのがある。これ等は皆習慣的に覺えて居るのである。

又此際珍らしい習慣がある。即ち去年の田植時以後に、其字の中に來た聟殿があれば、田植の最初の日に、お轉婆の早乙女等は、泥のついたまゝの苗束を投つけるので、無論不意打を喰はすのであるから、聟殿は驚いて逃出すを、何處迄も追かけて、遂々庭又は馱屋の隅に追込めて、思ふ儘投つけるのだから堪らない、聟殿は頭から泥だらけになる。其時聟殿が反抗すれば、失禮にあたるのださうだ。これは結婚を祝するのだと云ふけれど、或は嫉妬ではあるまいか。

土佐地方の稻虫送り

土佐の國では氣年八月頃になると、虫送りといつて稻虫驅除の爲めに、農家の若者共が集合して大なる鉦太鼓に合せて『齊藤別當實盛、稻の虫ヤ挫やげた』と高聲に叫びつゝ、日沒頃より夜半にかけて田道を巡回する。土佐では稻虫は齊藤實盛の化身であると云ひ傳へ、この虫送りをすれば其年は虫害がないと迷信して居る。

磐城四ッ倉濱の火喧嘩

磐城國石城郡四ッ倉の濱に幾百年以來、『火喧嘩』又は『火打』と名づくる奇妙な風習が、今も尙依然として農民と漁民との間に殘存して居る。それは毎年舊盂蘭盆の夕刻になると、何れも血氣盛りの若者が幾十人となく、逆川の下流を南北に挾むで、農民は農民、漁夫は漁夫と所謂敵味方双方に別れて對陣するのだ。この時何れも山のやうに積んである數駄の松薪へ、一時に火を點ずるので、炎々と天を焦さんばかりに燃え上る火勢、それが漸く闌にならうとすると、紅の炎凄まじくば、ち〳〵と音のする薪を南方は北方へ、北方は南方へ各敵の陣を覗つて擲つのだが、ひゅー〳〵と風を切つて飛んで行く其燃さしが川へ映つて、宛然數萬の鬼火が此川の上を飛で居るや

うである。擲げられる、擲げ返す兩軍こゝを先途と戰ふのであるから、その危險千萬なことゝいつたら、兎ても傍觀者の想像するとて、ろではないので、例年少くも七八名の負傷者を生ずるのだが、多年の慣習となつて居るので何人も怪しむ者はない。結局の勝敗は負傷者の多少と火勢の早く衰へると否とにあるので、農民が負くれば其年の米作は漁獲より少く、漁夫が負くれば漁獲が米作より劣るといつて居る。こんな迷信からこの危險なる風習は今以て毎年行はれつゝあるのである。

越前敦賀の網曳

越前の敦賀にも『火喧嘩』に似た行事がある。これは正月十五日に西町、今の幸町といふところで漁師と農夫と網曳をするので、此日重立ちたる家にて戎大黒を祭り、式終るや豫て設け置きたる極め

て太き網を、農夫漁夫東西に分れて曳くのである。農夫の方が勝ては其年は豐年、漁夫の方が勝てば大漁であるとの口碑よりして、双方必死となりて、こゝの掛け聲で、曳競をなすさまは如何にも勇ましく見受けらるゝ。

紀伊の牛交換

和歌山縣下の農家にては陰暦正月より三月迄の間に、伯樂が但馬地方より購ひ來たれる犢と、自家從來の飼牛とを交換する者が多い。今それに付ての慣例を記さんに、伯樂と交換の相談が纏まれば、吉日を擇みて近隣親戚を招き、先づ伯樂との間に糠代の取極をする。糠代とは伯樂が犢に添へて差出す、成牛今日迄の飼養料といふの意であるが、發育の良否によりて金額は異なつて居る。軈て双方手を打てば糠代を神棚へ、次に持佛へ供へ伯樂を初め寄合へる人々に酒

肴を饗應する。この時仕着せと稱して、農家より一枚の蓆を與ふるは普通であるが、もし今日までの飼養の結果がよく多くの糠代を得た時は、油團として紫縮緬に定紋を染め抜き、四隅に金總を附けたる牛の脊にかくるものを贈るのである。又右の油團の外に同じ縮緬地へ、定紋及び何郡何村何某と染抜きたる幟を添へるなど、大威張りなるもある。

伯樂が交換したる牛を曳きて農家を辭し去らんとする時、今まで犢が前趾に穿き來たれる鞋を更に成牛に穿かしめ、後趾のを農家へ殘し置くのが例である。これは一つは成牛の行先き宜からんことを祝し、一は犢の後の宜からんことを希ふの意であるさうだ。されば農家にてはその鞋を貯へおきて、己れ一代に幾度牛を交換したるかを、後日に知るの便宜となすといふことである。

丹後吉阪の狐狩

吉阪といふは丹後國の東端、西國靈場丹後松尾寺の麓なる山間の孤村である。此村で毎年正月十四日に狐狩といふを行ふ。當日は日沒頃より村の若者手に〳〵御馳走をさげて、村外れなる白鬚神社といふ氏神の籠堂へ集合する。愈〳〵人數が揃へば若者頭から儀式的に言渡しがある、それが濟めば酒宴は開かられるが、何處も同じ若者の常として呑む唄ふ踊る舞ふで、十二時過迄も飲騒いだ果は彼處此方へ轉寢をする。時移て午前四時頃恰度月が西山の細迫といふ處へかゝると、一同眠い眼を擦りながら發足の準備に取かゝる。

用意が出來れば二人の音頭取を定めて進發し、暮谷の奥まで來て一列に並び勢揃ひが出來れば、いよ〳〵狐狩りである。第一に音頭取が山も動くばかりの大聲を張り上げて、『わりーヤ何すりヤー』と

呼ぶと、他の者は聲を揃えて『若宮の祭りとて狐狩やー』といふ。これを何遍となく繰返し〳〵、谷の小道迄も立入りて呼はり〳〵村端迄出るのである。然し一度呼んで行つた所は必ず二度は呼ばぬ、歸りは默つて通行るのである。この夜は如何な用事があつても我家へ歸ることが出來ぬから、夜明て後各自吾家へ歸つて寢るのである。

この狐狩は今より二三十年以前に一年之を止めたら、其年は狐が非常に荒れ廻つて農作物を害したと云ふことがあるので、自然其廢止論は用ゐられないで、今に至るまで年々行ふのであるが、然し馬鹿氣て居るといふので、一年增に大聲を張揚げる者はなく、只咽喉の奥で密に唄ふて居るといふ有樣だ。

農人俗云三百姓○百姓乃四民之通稱也○惟以レ農爲二百姓一非也○漢志云○爾レ土植レ穀曰レ農○炎帝之時天雨レ粟○始敎二民植二五穀一○故祝二神農一○天子以二建レ辰月一祭二靈星一○以求二農耕一○靈星天田星在二於辰位一○故農字从レ辰○(和漢三才圖會)

婚姻

山城梅ヶ畑の擔ぎ

野蠻時代には掠奪結婚といつて、自分の思ひを運ぶ婦女を掠奪し來たつて、無理に婚姻をしたと云ふことであるが、この掠奪婚姻に類似せる風習は、當時尙京都の近在紅葉の名所高雄山の麓なる、梅ヶ畑地方では行はるゝのである。家產ある良家の子女はいさ知らず、日々柴薪を京に運びて口を糊する賤が女は、芳紀十六七にも及べは遠き途を一人で歸ることはなく、必ず年老ひたる者と三五相伴立て、踵外せる一種の鞋を穿き暗き小路を辿るのが常である。高雄梅尾槇尾の紅葉する頃には時雨の泥に白き褄を汚し、鳴瀧の寺御室の御所に花咲く時には、長煙管に手刻みの煙草燻らし歩みながらの高聲話

する趣は、都の畫師の筆に上るも道理である。夏の暑きも冬の寒きも日として京に出でざることはない。

頭髪は皆長くて美しく、衣服は粗末ながらも清洒して居て、胸當甲掛などの白きは皆能く洗ひて雪を欺き、其中にも年若き娘の紅の襟絆扱帶など、紺の衣服の麗はしきと釣合ふて、鄙びたるうちにも美はしく見ゆる。まして中には顔容の醜からぬ者さへ多いのである から其顔色の美はしさ、都女の色青醒めたるに較べて、更に一段の見勝りがする。

若き男の今宵は是非に「擔ぎ」去りて、情話つけんと物蔭に待つとも知らず出て來るは、老婆に伴ひ連れ蹣らるゝ乙女である。春尚淺きも雪解して野梅の白き村外れ、忍び出たる若者は矢庭に目指せる娘を擔ぎ、何處ともなく拉行けば老婆は扨は擔がれしか、相手は誰ぞ定て彼奴年齢と云ひ働きと云ひ、お竹の聟には好き緣と我か昔

の春を懐ひては悟り〳〵歸るさに、父母に其由云ひ傳へ、後は娘の心に任せ嫌でさへなければ、嫁入の相談が目出度整ふのである。野蠻に類する風俗ながらも亦其内に一種の妙味はある。

豐前長濱浦の拐し結婚

豐前國小倉町に長濱浦といふ處がある。人家は五六十軒、前は渺茫たる玄海洋に瀕せる磯邊のことであるから、こゝの者は多く漁業を以てその日の生活をして居る。されば萬事が自然と荒々しく婚姻の如きも一風變つて居る。誰でも已が心に思ひを運ぶ女があれば、その人これを朋友二三人に打明け、それが力を籍りて其女を拐かし來たりて切なる戀に浮身を窶せることの數々を口說き、是非に承諾を求むる。されど女が彼の人は色が黑いとか、氣立が意に叶はぬとか、または他に幾代變らじと契りし可愛の男ありてか、その意に從

はざるときは、幾日となく一室の中に押込置て、無理に承知をなさしむる。女が嫌々ながらも我を折れば、それ御意の變らぬ中とて早速媒介人を以て、其親へ申込むのである。女の親も當人が承知なればと別に異儀もなく、こゝに始めて戀の成立するのであるさうだ。

加賀山中地方の「おくせん」

『おくせん』とは、加賀國大聖寺を西南に距る凡そ三里なる、江沼郡山中村地方の男女間の馴染とか、情交とか云ふ意味の方言である。此地方とて婚禮は他の地方と大差はないが、こゝに『おくせん』と題して話さうと思ふのは、一種の簡易自由結婚のことである。それは例へば甲家の息子が、乙家の未婚の娘と情交を重ねるを『おくせん』と云ふので、乙家の娘は夜毎甲家を訪ふが、父母は之を知ても敢て干渉しないばかりか、却て次室に退き面を合すのを遠慮する。

處でこの『おくせん』双方が結婚を諾すれば、いよ〳〵三々九度の盃を擧ぐるのであるが、若し男が女を厭ふとか、又は女が男に嫌厭が來たとかいふときは、心附として金子若干を與へて、『おくせん』の關係を斷つのである。

琉球首里那覇地方の自由結婚

琉球の首里那覇地方では、相互兩親の相談によりて結婚する者は甚だ稀で、大概自由結婚である。女子が十五歳位になると一室に寢さし、女子自ら若者を引き入れ、屢々情慾を遂げて自己の意に合ふ者がある時は、始て兩親に諮り結婚するのである。最も相互に貧富を厭ふて居らぬ。又古より習慣として女子が年頃になり、情夫の數多き者は村内若者連中の名譽と見なされて居る。かゝる例であるから古より貞女なる者は甚だ少く、神聖なる處女も甚だ稀であるさう

だ。

安藝十二ヶ浦の樽開き

安藝國安藝郡に十二ヶ浦といふ土地がある。此地の習慣として他村の男と馴染むることを許さぬ、若し女子にして此制規に背く者があれば『樽入れ』と云つて懲しむるのである。それは他村に馴染の男を持てる女のあるときは、突飛なる村の若者等は、僅かなる酒肴を贈る。これを『樽入』といふ。これを受けたる女は後氏神の社に至り、神前にて篠々と太鼓を打鳴らして披露をする。この時浦の人々は老幼男女の別なく、流石に廣き境内も人をもて立錐の餘地なきまでに群がり、設備の酒を飲み肴を食ひて打興ずる、浦人これを稱して『樽開き』といふ。この費用は悉く彼の馴染の男から支出するので、またこの樽開をなさねば、女は馴染の妻となることが出來ない、

また人の妻たる資格なしとして一生之を娶る者はないさうだ。これも野合を防ぐ一種の手段であらう。

磐城守山地方の茶入

磐城國田村郡守山村地方に於ては結納を取替す前に『茶入』といふ式を行ふ。いよ〳〵某の娘を貰ひ請る事に定ると、其貰ひ請る家では紙袋を二つ新調し之に五十匁宛程茶を入れて媒妁人に渡す、媒妁人は之を持參して娘の家の茶と半分宛混合し其茶を娘並に兩親と共に喫し、又先方にては右の袋に茶を入れ口を封じて媒妁人に渡す、媒妁人は持ち歸て之を貰ひ方に渡す、貰ひ方の家では亦先の如く智並に家内一同で之を喫し、『目出度茶入が濟みました』と親類中へ通知し、夫より結納の取替せ婚禮の儀式に取掛かるのである。

山城梅ヶ畑の白裝束

山城梅ヶ畑地方の農家で行はるゝ婚姻の式はなか〳〵面白い。先づ花嫁が生家を出づる際に兩親は門口まで送り出し、大聲で『畢生戻つて來なよう』といひ藁火を焚く、俗に之を門火といふのである。それで嫁御寮の荷物調度の類は近隣の女輩が皆頭に載せ、尻を振りつゝ田植歌に音頭を取りて、節面白く唄ひながら練り行くのである。殊に目につくは花嫁の扮粧で、白き胸當、白脚袢、白手覆に身を固め菅笠眞深に面を包み、赤き襷を十字に綾取たる樣は、宛然白石嘶の仇討よろしく天晴美々しく勇ましく氣に見ゆる。

備前岡山地方の門火と鼻つき飯

備前岡山地方の婚姻儀式に他國に比して風變の事がある。嫁御寮

のいでや生家を出でんとする時に臨み、ぱッと一と煙り門火を焚くので、此門火は藁葺の家なれば其家根の藁を一と握取り、若し藁葺でなければ焚く程の藁を前以て屋根へ載せ置くのである。かくて嫁の其家を出で行く途中にて、見物のために路傍に集まりし老若の男女は、手に〳〵砂を掴みて害にならぬやうに投付くるのである。又先方の家に至りし時にも砂又は礫などを投付ける。若し此家が常に信用なく評判あしきか、又は憎まれ者の家であれば、石や瓦を投げ甚だしきは馬糞などを投りつくるなど亂暴狼藉の振舞をなし、來合せたる者に疵を負すことさへあるさうだ。

嫁が無事に先方の家に入れば、かねて親類緣者から貰ひ受けたる紅白丼に豆の入りたる餅を、見物の諸人に撒き散らすのである。かくして嫁は型の如く座に着けば膳を出すので、この膳の飯は椀に高々と盛上げ、其上に二本の箸を眞直に立てある。これを『鼻つき飯』

と云ふ、飯の外には一菜もつけてはない。宛然死者に供ふる『さば飯』と同樣である。この儀式が首尾よく濟みて後、三三九度の盃事をするのである。其他は他の地方と變りはない。

陸前松島地方の花嫁の馬乘

陸前國松島町地方では、嫁入する時花嫁と媒妁人と妻とが、『乘掛け』と稱する荷鞍の上に綺羅美やかなる蒲團三枚を敷重ねて、其上に悠然と乘て來るのである。すると群童は跟を尾して『嫁御よごれた。媒介嗅流れた〳〵』と囃したてる、其後から簞笥長持は、印袢天に紅の手拭を被つた御六尺が、節面白く唄ひながら擔ふて來る。嫁は必ず勝手口から入り、無茶苦茶流ながらも茶を立て舅姑に進め、それから祝言の座に着くのである。

○磐城相馬地方の籠馬と裸踊

磐城國相馬地方の婚禮の奇習を記さんに、嫁に遣はす家にて三々九度の盃事常の如く、別に變りたる事もないが、嫁を送るに持參する長持は、十六七歳の女ばかり顏に墨を塗り赤手拭にて鉢卷をなし、赤の襷をかけいと勇ましく『箱根八里』の歌を唄ひ、親類一同嫁を連れて出行くのである。嫁を娶る方にては嫁迎ひとして『かご馬』と稱へ、これも十七八歳の女共顏を手拭にて包み隱し、身に藁蓆を卷き馬の尾の如きものを尻にぶら下げて、四五人で嫁の迎ひに出る。途中嫁の來るを見れば四つに這ひながら近寄ると、媒妁人は『これは〳〵かご馬のお迎ひ御苦勞千萬』と禮を述べ、夫より一同家に來たりて酒宴を設け、婚姻の式常の如く濟めば、媒妁人及女共の周旋て一間の内に花嫁花婿を床入させる、其時の枕は婚禮の前に餅を搗

きし杵を用ゐるのである。夫から一同又々酒宴を催ふし唄ふもあり踊るもあり、女共は我勝ちにと裸踊を始むる。この地方の風習として裸踊をなすほどの者は、男勝りであるといふことで、其娘を持てる兩親並に兄弟は鼻を高くして見て居るさうだ。

越後地方の嫁送り

越後地方の婚禮は、二月四月に最も多く必らず偶數の月を撰むで行なふが、奇數の月は縁起が惡いと云つて執行はない。式日には嫁または聟の親しき朋友は、『嫁送り』、又は『聟送り』として縁家の半途まで送るので、縁家では此所まで親類または縁家の娘どもを迎ひに出し、互に持參の酒肴を取替し、通行の人にも分つので、此式が終ると嫁又は聟を先方の迎人に渡し、送り人は此處より還るのである。

茲に一つの惡い習俗がある。それは嫁祝ひと云つて、平時ならば泥をまろめ、又冬なれば雪などを固めて、嫁を目蒐て打ちつけるのであるから、折角今日を嚊と着飾た衣裳も、憐れな有樣になることがある。これは多く兒供が道傍に待伏して居て行るので、隨分卑猥な歌を唄つて騷いて居る。又この中に若者などが交て居ることもある。

日向地方の媒妁人と蛇の目傘

日向國地方にては見合も濟みて双方ともに異儀なく、嫁らう娶らうの相談も極まり結納の取替せも事なく了れば、黄道吉日を撰びて輿入の運びに至るので、やがて當日となれば天吉地吉吉日と婿方一同勇み立ち、嫁御寮の御出遲しと待受くる。媒妁人は行列に先つこと凡そ三十間、羽織袴の折目正しきはよけれど、何事ぞ花見る人の

長刀、手拭にて目深かに頬冠りをなしたる怪しき姿で、徐々と進み行くさまは、恰も狐に魅されたる庄屋殿のやうである。その後より今日を一生の曠と粧ひ飾りたる花嫁が、綾羅にも堪えざるべき細腰嬝々として、人に見らるゝが羞かしきか、蛇の目傘を半分開きて花顔を覆ふさまは、惜しや中秋無月の感がある。この傘は晴雨に關らず必ず用ゐるのである。

琉球の婚姻行列

琉球の婚姻行列を記さんに、新郎新婦共婚姻の時は、竹馬若くは大なる杵の頭へ手網を結びつけ、春駒の如き形狀にしたものに打跨り、醜き容體をなして市中を練り歩き先方の家に至るのである。これは畢竟他日の離婚の忌まはしきを口にせざる防禦策であるさうだ。いざゝ床入と云ふ場合に際して、媒妁人等一同新郎を窃に青樓に伴ひ、流連數日に亘るので此間花嫁は家に在りて種々の馳走を作り、頭上に載せ日々青樓に運び婿殿に贈る。これは女子の最も忌むべき嫉妬の念を斷たしむるが爲てあるさうだ。

信濃清内路の道饗應

信濃國下伊那郡清内路村にては婚禮の當夜、花嫁が盛裝して婿許乘り込まふと云ふ時、媒妁人を始め縁者の者數人、何れも屈竟な若者が五合乃至一升入の德利を提げ、盃數個を懐中にして花嫁の前後左右に附添ひ、いよ〳〵其家を出づるのである。さて是より先に村内の若者は豫め花嫁の通路に當る道筋へ、三四ヶ所、何れも小やかなれど堅固な垣を結びつけて、一行の來るのを待て居る。軈て一行が此所へ來ると、附添の一方は垣の取毀ちに着手し、一方は其間二三十分ばかりの間携へ來つた酒を、若者や花嫁を見る爲めに群集し

て居る者共に一々盃をさして飲むるのである。すると皆爭ふて盃を受ける。斯く垣毎に之を行ふので僅か三四町の所でも、一二時間もかゝるばかりでなく酒は一二斗も費す。婿の家に着けばお定りの三々九度、酒宴に充分の醉を催ふしたる時最後に一合入許りの盃を、各自にさし之を傾けて退散するのである。

相摸橘樹地方の「さうとも〳〵」

相摸國橘樹郡地方にては、花嫁婿已に對座し式三献の盃事終るを合圖に、嫁御寮は都かに立ちて婿君の傍に進み行き、秋波一瞬嬌音暖かに然かも羞を含みて、『お前をたよりに來ましたよ』と述ぶると、媒妁人はやをら新夫婦の間に立ちて、拍手一番之に和して『さうとも〳〵』といふに、親族席上の人々亦これに和し、之にて當日の式は了るのである。この『お前をたよりに來ましたよ』の一言は、婿

君の耳底深く入りて、畢生忘るあたはざるの初音となり、後日良夫が妻の行爲に嫌焉たらざるあるときには、この言葉を思ひ出して其齟を散ずるとのことである。

信濃粟佐の丸裸

信濃國埴科郡西船山村字粟佐村にては古來傳はれる婚姻に付ての奇風がある。當夜三々九度の盃に夫婦固めの契りを結び、いざお床入といふ時になれば、舉村の若者寄り集ひて嫁も婿も丸裸にし、濕〻具めくものまでかなくり棄てしめ、裸踊が所望ぢやと云はぬばかりに、『嫁樣婿樣』と囃し立てるので、唯さへうら恥かしき今宵なるに是は亦人の前、我が身の置場に苦しみ、花嫁は屏風の蔭に身をすくめてしく〳〵と涙の泉を汲めば、婿殿も只管狼狽して額に手をあて、腕組みなどして『あれ見よかし』などゝ嘲らるゝ其度毎に、身慄ひ

するは見る目も氣の毒であるさうな。これも婚姻當夜の恥かしさを思ひて、些々たる事に離婚を口にせざるための防禦策であらう。

美濃武儀地方の擂鉢割り

美濃國武儀郡西南地方にては婚姻の當夜、三々九度の盃事の將に終らんとするとき、媒妁人は大きな擂鉢をさも恭しげに捧げ出で座敷の中央に据え、土地の祝歌を唄ひながら摺子木を廻し、歌の終るると同時に全力を注ぎて擂鉢の眞中をつくと、擂鉢は美事に眞二ッになる。其所で媒妁人は舅姑の前へ出て『先づお目出たうござる』と祝詞を述べ、これで一同退席するのである。實に見るも馬鹿〳〵しい儀式で、殊に新夫婦は眞紅な顏をし、列座の客も失笑を忍むで居る。近來はだん〳〵この風習が衰へたやうではあるが、まだ舊習の家では依然として行ふのである。また貧富を問はず一般に婚姻の式

場は、戸障子を開け放ちて外から一と目に見えるやうにしてある。

越後長岡地方の送込み

越後國長岡地方では、婚姻の當日三々九度の盃を濟したる後、聟嫁を首め兩家の親戚知己等列座して酒宴を開き、四海波靜かの謠も終つて聽て刻限となれば、嫁は先に待受けの人に導びかれて、其場を退き臥床に入れば、程なく媒妁人を始め近緣の人々三四名立ち上りて、突然聟を抱上げ其儘臥床に擔ぎ行き、之を投込みたる上再び其座に復して一同に向ひ、『目出度送込みを濟しました』と披露して、夫より又もや盛に酒宴を催ふして散會するのが例である。

磐城地方の餅搗祝ひ

磐城地方では、婚姻の式を擧げた翌日、嫁方の兩親及び親類を招

きて、正客として饗應し「餅搗祝ひ」を行ふ。未明より庭前の廣き所に大臼を据え、杵は千本杵とて長さ六尺位にて、口徑二寸位の丸棒を一人一本づゝ持ちて、一臼に二十人位づゝ掛り、其家より祝ひに出されし揃の白手拭を冠り、餅搗唄を唄ひながら賑に拍子をとりつゝ搗くのである。其唄は

『是れのーお裏によしがら二本、嫁と姑のあいのーよしェ。今年しや嫁娶り亦來年は、よばれ來るぞひ孫祝ひ。ハ、よいさァ〳〵

その手てやらかせ、練れたら持て來い。

愈盛になれば今度は嫁と婿に、一本の杵を合握にして搗かせるのである。

陸奥八戸の婚禮祝ひ

陸奥の國八戸町に婚禮の際「祝ひに行く」といふ奇習がある。夫

は婚禮の晩三々九度の盃事が濟ひで、盛にお酒を飲み大騒ぎをして居る頃を見計らつて、其家の知己であらうが、又見ず知らずの人であらうが、御客に招かれずとも行くのである。其人數は一組四人である。何れも男で一人は昔の侍風に化ける、髪はチヨン髷の鬘をつけ、三寸大の大紋に染めた紋附を着て、平袴の後方を故に捻くつて着る、刀劍の大小を帶びたつもりて、大小の摺古木を二本差し、印籠のつもりて大きな樺煙草入を下げる、顔へは白粉をコテ〳〵と厚く塗り、或は紅や墨を附けて何處の誰やら、容易に見出し得ないやうに化ける。奥樣も夫れに似たもので若徒やら仲間がお供をする、何れも滑稽な服裝で、芝居や踊で使用する衣裳を借て着用するものもある。

偖其四人が揃つて案内もなく、悠然と其家に往く、先づ〳〵これへと云ふを待たずに上座に座る。御祝ひとして二三十錢か五十錢位

包むだ物を出す、されば歸る時には持參した金高を倍にして、返へさねばならぬ。又朱塗の重箱へ燒麩を二つ重ねて入れ、或は正物の松茸と鮑を一つづゝ入れる、夫婦中よく納るやうにと祝ふ意味なのである。されば此重箱へは是非共餡餅を入れて返へす、二升樽へは五合位の酒を詰めたのを出す、この五合しか詰つて來ない樽へは、二升詰めて返さねばならぬ、中には水を入れて持て來るものもある。其上相應に酒肴を、饗應する、最初こそ侍のつもりで大に氣取て居るけれども、追々醉の廻るにつれて、姿勢は崩れる言葉は亂れる、或は隱し藝を演ずるものもある。彼是一時間位も愉快をして、澤山な土產物を貰うて歸る、これを『祝ひに行く』と云ふのである。

然しこれ位なのは至極穩かで、餘り慾の深くない先づ上等の部であるが、慾得一點張りて來る者もある。こんな連中は一と晩に幾組も來る。若し富豪家であれば、遠方までも聞えて居るから五組も十組も來る。中には服裝を一變して二度來るものもある。何れにもせよ充分饗應を受けた上に、錢や酒や餅を貰つて歸る習慣であるから、祝ひに行かうと思つてる若者は、其の晩を前以て喜んで待つて居る。若し待遇が不親切であるとか、御土產が不足であれば、他日新夫婦が仇をされる、然らざれば其家へ迷惑をかけるか損害をかけさせる。古來この習慣は廢絕しない、一時は警察で禁止したこともあつたが近來は決して干涉しないさうだ。

石見濱田地方の石地藏

石見國濱田地方にては古來の習慣として、婚禮の夜土地の若者が何處より持ち來たるのか、大小の石地藏數十基を舁ぎ來たり其家の門前に立て並べ、手を拍て目出たし〳〵と祝ふを禮としてある。これは石地藏は胴體重くして、据えればなか〳〵に動ぬものである

から、嫁なり婿なりこの石地藏の如く、一度婚禮して妻となり又夫となりては、友白髮の末長く睦ましくあれかしの意であるさうだ。さても〳〵御念の入つたことである。又出雲の三崎地方にも是に似た風習がある。それは石地藏數基を座敷に舁ぎ込むのださうだ。

信濃上田地方の籠ぶせの祝ひ

これは一に『水籠の祝』と謂て維新前までは信州上田附近に於て盛に行はれたが、今は僅に其名殘を遺して居るのである。其摸樣は陰曆正月元日鷄鳴晨を告ぐるや、夜明遲しと待ち受けたる近隣の小兒等は打集て、豫て調製置きたる直徑凡そ曲尺四尺深さ凡そ三尺斗りの籠の上に、葉もて造りし鶴龜又は松竹梅など飾りつけたるを、其前年嫁を娶りし家々へ擔ぎ込み花嫁に被らしむる慣例である。左れば花嫁を貰ひし家では此日は嫁に祝儀髮を結はしめ、燈火點じて

小兒等の來たるを待ち受る。多數の小兒等は提灯をふりかざし、口々に『水籠のお祝ひ』と謂ひ囃しながら入り來る。家人は嫁を取り卷き玄關口に座らしむると、小兒等は籠を漸く頭上に差上げて今や花嫁に被せんとする一刹那、家人は咄嗟の禮に紛らして巧に之を押止め、其勞を慰め茶菓を饗するのである。

常陸九面の「ぶんだせー」

九面といふは磐城と常陸の國境、舊日本鐵道線の勿來驛を南に距ること二十町余り、彼の有名なる勿來の關の麓にある六七十戸の小村落であるが、こゝに『ぶんだせー』といつて婚姻を祝する奇妙なる習慣がある、夫は陰曆正月十四日の夜のことで、五日頃より小供が大勢集まつて酉小屋を始める、酉小屋といつても別に小屋を建てるのではなく、山の麓を掘つた穴藏で『ぶんだせー』は此穴藏連中に依

て行はるゝのである。

いよ〳〵十四日になると朝より準備に取掛る、先づ材木屋より杉又は栗の長さ二間くらゐの五寸角を借來つて、其に二尺くらゐづゝ間を隔てゝ繩をつけ、一つづゝ長さ五六尺の竹を通して兩方から擔がれるやうにする、これが肝心な要具なので、次に廻り七八寸の青竹を買求めて、最端に葉を少し殘し、其處へ幣束を結びつけて是を盆傳と命名る、道具はこれで完備したのである、そこで五六歳より十四五歳までの少年は、草鞋に白手拭といふ勇ましい打扮で、酉小屋へ詰掛け日暮遲しと待て居る、暮色蒼然たる刻になれば、高張提灯を先頭に盆傳角物と順々に列をなして、口々に『はんしよー、はんしよー』と大聲に連呼しつゝ、村内を一巡して酉小屋に歸る、これは先づ勢揃ひといふ格である、日は全く暮れて各家燈火明かなる時となれば、愈本式の『ぶんだせー』となる。

行列の順序は勢揃ひの時と同樣であるが、勢は一層勇ましく『はんしよー』と大呼しつゝ、昨年の正月から其年の正月までに婿取り嫁取りのあつた家へ行く、其家では打破らする所へは古雨戸を用意して酒肴を拵へて待つのである。『ぶんだせー』行列が其家へ着くと直に一同有らん限りの大聲で『ぶんだせー』と叫びつゝ、彼の角物を以て其家の用意せざる新しき雨戸を打破らんとする、其家ではさはさせじと互に爭ふのであるが、小供とは云つても多人數が、おめき叫んで力の限り働くのであるから大人も殆ど辟易する、殊に雙方へ彌治馬が加はるから暫しは修羅場である、結局古雨戸をバリ〳〵ッといふ音と共に破り終れば、一同拍手喝采して酒の段になる。すると小供は一齊に『嫁（婿取なれば婿）樣だしなんしよう』と、聲を限りに連呼する。出て酌をするのが例であるから、耻かさうに花嫁が出で來て酌をせんとする一刹那、物蔭より花嫁の頰くべッタリ

と墨を塗附る、花嫁は驚て奥へ逃げ入る、群集の笑ひ聲は潮のごとくである。是は松煙へ油を入れて容易に落ちぬやうに製した所謂油墨、夫を小供の中の惡太郎が撰ばれて塗り方の任に當る、旨く仕終ふせば鼻が高いとやら。斯くて墨塗り終れば酒肴の饗應を受け、何程かのお包を祝儀として貰ふて、次の祝儀のあつた家へ行くのである。此地方の子供は何よりの樂みとして、正月もこれが爲に待遠なのである。近年は諸所より此奇劇を見んとて遙々來る者も少なくないさうだ。

陸前岩沼地方の茶せご

陸前國名取郡岩沼町地方では、『茶せご』と云つて舊曆正月十四日の夜、新婚のあつた家へ、祝ひに行くのか美みに行くのか知らぬが男女共扮裝を思ひ〳〵に變へ、木製の變てこなものを、細い紐にて

胴中へ結ひつけ、肩に擔ぎ新婚の家の門口に佇み、開口一番、『北の方（或は秋の方）から茶せごに參りました』と云ひながら、突然座敷へ上り其を振廻しながら、『をんがれ、〳〵、をんがれーやー』と謠ひつゝ、跳廻るのである。然して夫が終ると、其連中が誰なるか解らぬ時は酒肴を出し、新婚夫婦が酌をして馳走をするのであるが、若し誰だと云ふ事が發覺した時には、這ふ〳〵の體で逃げ歸るのである、亦兒童も隊を組むで祝ひに來るので、是には餅を與へる。これは夫婦和合の基だと云ふので、新婚のあつた家では當日は、酒肴を調へて祝ひに來るのを待て居る。

下總三原の婿祝ひ

千葉縣東葛飾郡三原村にては毎年二月の初午には、稻荷の社に至り酒を飲み踊り唄ひ、其時前年のその日の後に嫁を娶りし者、又聟

に來りし者あれば其者を山車に乘せ、大原口といふ池の邊に引出し如何云ふ理由かは知らぬが裸體にして此池に突き入れ、周圍より芝の切りたるのを投げかけ打ち附け、囃方にては面白可笑しく笛鉦太鼓を鳴し、わッ〳〵と皆々関の聲を揚げ、其騒ぎは非常なものである。其者の嫁は可厭でも如何も見て居ねばならない、暫時して掛り役が來たり其者に向ひ、『そなたは幸福ぢや、御稲荷様もお喜びであらう』といつて、人々に酒をさゝせ頻に自出たがるのであるが、何が目出たいのか幸福なのか一向解らぬ。又この風習も何時の頃より行はれたるやも解からぬ。

羽前西田川地方の若夫婦の「せつげう」

羽前國西田川郡地方にては、毎年一月十六日は『若夫婦のせつげう』と稱へて、早朝より嫁なれば嫁の里へ婿なれば其實家へ、正月

禮に行くを常とするが、夫は宛然婦の供とも見ゆる風體にて、婦を前に立て必ず太鼓樽を手にし、土産物及び着替衣裳等を背負ひ、甚だしきは納豆苞をさへ添えて荷物にし、後方からて踊きて行く。扨て到れば豫て待ちつゝある事であるから、徹夜の宴に鯨飲を試むるので、殊に初めてなれば親類縁者をさへ招きて大一座の饗應をする而して大抵は夫婦とも二十日迄寢泊りして、二十日には禮返しと稱へ歸宅して更に饗應のである。

上古は、始より女の男の家にゆくことにてはなく、たがひの媒妁すみて後　女の方へ男往きて婚禮をとゝのへ、後にともなふと見えたり。故に西記古式に嫁入の式は見えず、婿取りといふ作法多く見えたり。　（南　嶺子）

祝賀

附宴會

志摩の出産祝ひ

志摩國の村落にて出産のある時は、親戚知己より『ちさい』と稱して米三合に大豆三粒、或は小豆三粒を添え重箱に入れて持行き、又七夜までに祝儀として反物を贈るのが例である。又産婦の枕もとには稲荷除けとて短刀を置く、これは生れし兒に狐の憑かぬやうにする爲めださうだ。又子の生れしときは即日稲荷神社へ赤飯を藁に包みて供へ、三日目にも七夜にも稲荷に參詣して赤飯を供へ、狐の憑かぬやうに祈る。

周防陶村の水祝ひ

周防の山口市を南に距ること四里ばかりなる吉敷郡陶村近傍の水祝ひの式は、古より舊暦正月十四日の晩に行ふ、これは陶村近傍のみではない、周防長門全體大同小異此式をなすのであるが、こゝには陶村近傍に行はるゝ事實を記さう。此日は村々の若者は畳間藁に馬の形を作り、口に縉をくわへさせ、又は大根を四角或は蒲鉾形に切りて松竹梅を挿したり、種々の目出たき品を作りて準備をなし置き、夜に入るを待ちて或は二人或は三人づゝ手分をなし、新婚せし家又は新築せし家、素封家などへ祝ひに出掛ける。まづ玄關又は戸口に至り『とへ〳〵〳〵』、『とひ〳〵〳〵、と唱へ』右の松竹梅又は馬型などを盆に載せたるを密と置き、急ぎ退きて生墻若くは門脇に潜み隠れて居る。祝はれた家では、其松竹梅又は馬などを丁寧に神棚に供へ、只盆ばかり返す譯にはゆかぬから、其代りとして御供餅一と重或は二た重、又は金員を何程か紙に包みたるを添へ、若く

は酒二升樽くらゐを其入れ物に載せて元の處へ置く、若者の方では夫を蔭から見て密と取りに行くのである。家の戸の内では手桶や桶などに水を一杯用意して、其品々の入れてある盃を若者が取て歸るとき、ざんぶと水祝ひをする又墨を顏へ塗りつける。若者の方では成べく水をかけられぬやう又墨を塗られぬやうに、其品を持つや否や一散に逃げ出すのであるが、十に七八までは水を掛けらるゝ。中には簑笠合羽などの扮裝で、水祝ひされても着物の濡れぬ用意をして行くものもあるさうだ。若者等は其貰つた金錢又は物品を若者會所へ持ち歸るので、夜の十時頃になれば御供餅の山を築き、祝儀の十圓餘り酒の二三斗も集まるから、村の娘連を手傳はせ雜煮餅又は種々の料理をつくり、大酒宴をなして目出たく解散するのである。

攝津御影の釀造祝ひ

攝津の御影町は酒造を以て其名が全國に聲いて居る、この地の酒造家に於て『初揚げの式』といふものがある。それは毎年一月下旬から二月上旬までに、清酒の出來上りたる日を祝して酒宴を張るので、酒造家は誠に目出たい日としてある。賓客席に着けば主人恭しく出來上りたる新酒を掬み出して、衆人に鑑定を乞ふと、人々口中に含みて之を味ひ、而して昨年と當年との釀造の工合より味の善惡、香の可否色の濃薄等思ひ〳〵の批評を下して主人に滿足を與へる。夫より酒抔出て藝妓仲居の周旋で、十二分の經應をするのが例である。それで何れにても此初揚には必ず最初の肴に、大なる蛸の足一切を出すのが例てある。これは蛸の足は能く物を吸ふ故、其緣喜を取りて出すのださうな。此地方にて蛸の足を用ゐるは初揚のみに限らず、婚禮開店轉宅などの祝ひにも用ゐる。

但馬大屋樽見の卯の當

但馬の大屋樽見といふは戸數百戸餘りなる小村であるが、毎年十一月卯の日を以て村内の選擧により、財産も相當に有する家の男女に拘はらず長子のある家を見立てゝ、『卯の當』の席を勤めしむるのである。これは往古長子ある者の人身御供に上りしを、中古廢せられし祝ひとして行ふので、此の席を營む家は名譽としてあるから、村内一同は其家に至り三日の間は飲め騒げの大酒宴を張り、一切の費用はこの家にて支辨し、及ぶだけの馳走をして諸人を饗應するのださうだ。

八丈島の献盃

八丈島の献盃の方式を聞くに、主客が座に着く膳が出る。是迄は

變りはないが、扨お酌が一人出て主人の前に座ると、主人は盃を出してお酌をさせ、『お毒見をいたします』と云つて一杯飲み、客の一人に向つて『何某樣へ差上げます』と、盃はやらずに口で言ふと、お酌は直ちに其云はれた人の盃にお酌をする、其人はこれを飲みて『頂戴しました』と云ひ、再びお酌をして貰つて飲むだら、他の人に向つて『何某樣へ差上ます』と口上にて云ふと、御酌はまた其人の前に至りお酌をする。かく甲より乙に、乙より丙に順次一巡し、それより思ひざしに右の手順を以て、口上で盃の交換をするのであるが。お酌は其指名せられた人に專屬して、其間決して他人へお酌をすることは出來ぬ、故に他の人は飲みたくても、お酌を横領する事と出來ぬから、指名せらるゝまで咽喉をぐひつかせて、待たなければならぬといふ規則である。然し是丈では餘に淡泊に過ぎて、興味が少いやうであるが、この口上献盃の間に又段々奥の手があるので、

例へば甲が乙に獻した時、若し甲の人が飲みさうな人であれば、乙は之を受ずして お押えを願ひます』と云ふと、甲はもう一杯飲むで、改てさゝねばならぬ。また此際甲が盃を乾さずして、チビリと嘗めたことを發見したら、乙は『改めて願ひます』とか或は『盃をお乾しなすツて』とか云つて、又甲に飲ませる事が出來る。若し下戸であつたら指名せられた時、チビリと嘗て、『頂戴しました』と云ひ、再びチビリと飲むで、『何某樣へ差上げます』といつて、他に盃とお酌を轉ぜしむると云ふズルい手段も出來る。

また若し『頂戴しました』と云つた限て、話などに實が入り、次に指名するを忘れて居ることがある時は、飲みたい人は彼に向つて、『何某樣れあひをいたします』と辭りて、お酌を自分の方に引付け、よき程に飲むでまた誰かを指名することが出來る。この邊の呼吸をよく呑込さへすれば、酒癖ある人にあまり澤山飲ませぬやうにする

ことも出來、上戸は好き程に、下戸は無理に飲むに及ばず、上戸下戸陶然として席亂るゝに至らざるばかりてなく、お酌は一人で事足り、盃は各自の手持て、人の盃を受くるに及ばず、至極衛生的に出來て居る。

かくして興盡くる頃、上席なる客は『酒を退いて頂いてば如何てせう』と衆客に相談して、衆客これに和すれば、即ち主人に向つて『何卒お納めを願ひます』と云へば、主人これに應じ『それては失禮ながらお言葉によつて、納めませう』といつて、一盃飲むで納盃とし、或は猶興足らずと思はゞ、『今少し御過しくだされ』といつて、更に飲みさうな人を指名し、前の通り繰り返し、然る後上席の客の言葉に隨ふて納盃し、御飯を饗し、各自退散と云ふ順序になるのである。

婦女

京都の大原女

『大原女』と云へばよく人の知つて居ることてあるが、この大原女の扮装は、白の脚袢に藁草履を穿ち白手甲を箙め、前垂は三尺幅を用ひ、何れも飛白又は紺の無地で、年長は紺の無地又は飛白、年少は重に飛白の衣裳を身に着け、木綿にて製されたる手綱染め、又は更紗の細き帶を前て結び兩裾を掲げ、牛又は馬を牽き頭に柴を戴せ手綱を握り腰を振りつゝ歩むので、又柴の代りに頭に梯子鞍懸などを戴て來るものもある、其賣聲は『梯子や鞍懸はいらんかいな、打盤や横槌はいらんかいな、奥樣打盤や横槌沽ておくれんか、安く負て置く、沽ておくれな』、年少の娘は薄き籠又は春秋の草花を容れて

頭に戴せ朝まだきより『花いらんかな、花いらんかな』と市中を廻るのであるが、皆赤覆輪の襷をかけ頭には必ず新手拭を冠つて居る又正月の七日には七草を賣り歩くが、前の賣聲とは異つて居る。『薺、七草よーい、薺七草薺よーい』と優美で其音吐朗かに、聽者をして漫に桓武の朝の昔日を偲ばしむるのである。大原女の頭髪は總體濃く年長年少共總髪で髱なく、房さりと根元で括り先づ島田然たる髷である。その村の風習として女の立働きの善惡で縁談の口に自ら遲速がある。殊に嫁入相談の折から、牛や馬の一匹も牽かせるや否やを媒介人に問訊ぬるとのことである。牽かせると云ふのは持參するとの意味ださうだ。

京都西陣のお褌

織物で有名なる京都西陣に『お褌』と云ふことがある。これは寸

歳位なる男女を近在又は遠方から、年期證文で七ヶ年又は十ヶ年とか險で買入れ、機業に使役する小兒のことを云ふので、毎朝星を戴いて起き夜更まで機を織り、又は絲を繰るのであるが、毎月朔日と十五日の外は他行を許されない。京都に芝居があつても又どんな觀世物があつても、西陣が溷はされば市中が淋しいとの事で、其盛況を占ふ事が出來る。所謂お褌のべたる前垂は風通博多御召の類で皆織出しの殘りの切帛で製へる。京都では前垂のみ立派な品を着けて る人を、お褌見たやうだと云ふ。

攝津神戸の婦女

神戸は概して婦人の職業の多い土地であるから、隨て嗅ア天下の家庭が多いやうだ、中流以下の細君娘などは商館の倉庫へ、煙草絲瓜寒天麥桿眞田陶漆器扇子玩具其他種々の、輸出雜貨の檢閲下調に

行くので襤褸綿烏毛まんがん等は極下等の部だ。眼に一丁字なき者多く、言語動作卑猥醜陋なるものが多數で、身に荒布を纏ふも紅粉の粧だけは、紅裙者流をして後に瞠若だらしむる勢である。

今一層劣等になると燐寸工女だ。齡耳順に至る老婆もあれば四五歳の幼女もある、是等老幼は自活の爲に賃錢を得ねば一家を維持し能はぬので、總じて此社會に勿論教育のあるべき筈なく、清潔を汚されても黄白を得れば喜んで之に應じ、廉耻の何ものたるも知らぬ無邪氣の少女も自然この惡風に感化せられ、畢生の希望は只金錢あるのみだ。

○尾張半田地方の「ちやんから」

「ちやんから」とは、尾張國半田町地方で、紡績絲を以て白木綿を織る機の名稱であるが、この地方の下流の婦女子は、年齡十二三歳

から皆此業に依りて生活の補ひをするので、裏町通りへ入いると此處でも彼處でも、ちやんから〳〵の音喧しく、春の晨も秋の夕も年百年中、殆んど間斷なく其界隈に聞えるので。この、『ちやんから』の織姫の多くは、機屋に傭はれて居るのであるから、隨て風紀の取締が行屆かぬのみならず、往々寛に過ぎるのである、夜になると彼の若者連が湯上りと云ふ見得で、肩に手拭をかけ鼻唄か何かて、夜な〳〵その間を徘徊する、織姫の方も邪魔されながらも愛嬌を撒まく、『誰さん今晩はお早いね』『アヽ何だかおまへに遇ひたくなつたから大概に仕事を打遣つて來たのさ』くらゐをきつかけに思入がある。この工女の唄ふちやんから節と云ふがある。

『あー酒に醉た〳〵、五勺くーのーさーけに、ヨー、一合呑んだらアー、由良のー助ヨー、チャンカラ〳〵。

『あゝーおまへ一と人りとさだめーてをゝねてヨー、浮氣や其日のー出來でーころヨー、チャンカラ〳〵。

『お前さんの樣に、そう酒呑んで、私に薦ても被せる氣か。

『一夜ごんげの傘松は、松は枯れても名は殘る。

因にこの地方に『やしやこら』と云ふ者がある。それは淫賣婦の名稱で、名古屋の『もか』、大阪の『じゆつせん』、東京の『ぢごく』、北海道の『ごけ』、伊勢の『はしりがね』等の類で、其風俗は一見酌婦と見分けが附かない。『やしやこら』が酌婦もすれば、酌婦が『やしやこら』もする。この『やしやこら』の中て下等な者は、郵船其他の汽船帆船の入港する毎に、飴菓子蜜柑等を商ひに行くと見せて、密に其本業を稼ぐものがあるさうだ。

紀伊熊野の女

紀州熊野といへば名にし負ふ荒磯で、殊には山又山の片田舎で、

平地とでは殆んど無い位の處であるから、住民の多くは漁夫だ。從て女でもなか〳〵磯なれた者で寒中から春へかけて「磯をする」と云つて、岩に着いてる海苔を、膝乃至は太股あたりまで入て、鮑の貝殼で木棉の袋の中へ搔き落す。而して潮が退くと鮑取りだ。腰ぎり入つて輕やと打つける浪を、時には頭から被つては取るのである其採り得た貝は辛く烹られて晩餐の膳に上る。

氣候が暖く成ると今度は若菜摘だ、山ばかりの土地だから、一面に蕨いたどり、狗背などが生える。これは一旦蒸して干かし、一年中の副食物にするのである。

近江大津追分の前綱

滋賀縣近江國大津町の字追分には、昔より『前綱』と稱する一種の婦女の勞働業があつて、新造より老婆に至るまで日々之を稼業として居る、これは追分より大津町に至るまでの間に十町餘の坂道があるが、坂道の損壞を恐るゝが爲め牛馬の通行が止められてあるので此坂へかゝれば前綱にて曳かしむる。其服裝は上には半着として乳の下迄位の衣服を着し、下方には幅廣き前掛を卷き附けて居る、其色は皆黑若くは飛白で、荷車の來るを見て車夫に就き賃金を定むるや否や手早く綱を附け、一輛の車を二三人にて曳き行くのである。其歩み方は地面より一尺くらゐの所まで頭を下げ、力竹にてかぢを取るのが常である。是れ『大津追分の前綱』と稱して、他の地方にては未だ曾て見ざるところの奇風俗である。

Q 淡路由良地方の女

由良港は淡路島の東南端の突起せる所にある港で、砲臺が築かれてからは繁榮なる町となり、今では戶數二千餘もあるさうだ。この

地方の女の勢力は隨分盛なものだ、要之女が能く働くからで、山に行きては柴を刈り大抵二十貫から二十五貫位は頭の上に戴き悠々として歸る。又土方荷擔なども女子である、又娘の如きは毎夜遊びに出て三々五々隊をなし、町内を放歌しつゝ歩み、夜更れば他家に寢泊りするが親達は平氣である。却て年頃になつて清淨無垢の者は、意氣地なしとて小言を頂戴するさうだ。然れども一旦嫁に行き鐵醬を附くれば、情夫を持ち又は姦通などをする者はなく、貞節を守る事は感心なものだ。

娘が一旦青年と契りを結びながら、外の者と情を通ずるか又は故なく違約した時は、青年は朋友を頼み一團隊をなし、其家に押込み引摺出し擔歸つて、無理に鐵醬を含ませ妻となすのである。又意地擔ぎとて右の如く鐵漿をつけて其儘歸宅さす者もある。この擔れた者は此地では疵娘とて大に厭ふのである。

○播磨姫路の女

播磨姫路の市中を通る人の目を惹くは、總ての店頭に淡化粧した其家の妻又は娘が、火鉢を抱えて座し客に愛嬌を振りまくことであらう。昔から姫路の里には美人多しと云ふが、實に客貌の美麗なる娘嬢が多い。しかしながら女の粧ひは高尚優美の方ではなく、藝妓の浮華なる風を摸擬る者が多い、殊に中流以下にあつては人の圖者となる者が多い。されば裁縫場に通ひ或は普通學を稽古する者少く所謂淫行者の方である。

神戸などに引かへ割合に遊藝の稽古屋は多く其等は皆賑ふので、行く者は女ばかりでなく男も隨分行くのである。近來婦女の間の流行は茶、生花などであるさうだ。

名古屋の藝妓と娘

名古屋藝妓の特色とすべきは、其愛情の冷靜なることである。假令嫖客が通人であらうとも好男子であらうとも、これに逢引して金錢物品を入揚ると云ふことは先づない。されば嫖客の爲に逢引だの義理だの意氣地だとのと云ふことは、見たくても見ることは出來ない。取れるだけ取れば後は肱鐵砲主義で平然たるものだ。自分で身上りをして嫖客に遇ひに行くなどは極少く、芝居見物にさへ行かぬ。芝居見物などは多く嫖客を勸誘して、見物中の揚代も附けさせ其上自分の快樂を求める、其薄情狡猾にして利慾一方なる殆ど先天的だ。契約年限を過失なく無事に勤めて抱主にも充分の利益を與へ、自分も懷中を溫めて廢業するのが十中の八九は然りである。斯る有樣であるから情死だの驅落だのと云ふことはない。他國へ行つても名古

屋種だと云へば、抱主に喜ばれ直段も高いのは、要するに此の冷靜なる情を以て、凡ての嫖客に萬遍なく愛嬌を振蒔き、專心業務に勉勵して抱主に忠實を盡すからである。

名古屋の藝妓と東京の藝妓とを比較して見れば、其異同は種々で第一に義理達引意氣地などゝ云ふことのないのは、其最も重なる點で、其他役者藝人に浮身を窶すことなく、從て幟引幕等を贈る者も少なく、芝居の總見物なども一年に一度位しかない。尙ほ延喜棚といつても通常の神棚で、比較的寂しく、三味線箱もなければ箱屋もなく、三味線は繼棹のまゝ袋に入れて女中が持ち歩き、座敷へ出ても色直しとて着物を着替ることもなく、寒いからとて羽織を着る位のものである。

藝者ばかりが前のやうかと云ふに、名古屋の風習が一般に斯の如くである。名古屋の人は自分の子女を藝娼妓にするを、恥としない

ばかりでなく、已が娘が藝妓となり娼妓となつて美麗な着物を着け、車にでも乘つて行けば却て鼻高々と誇負する位である。中流以下に至りては自分の子女が藝娼妓の別なく、賤業に身を沈めて其父兄を補助することは、幼時の養育の恩に報ゆる當然の義務だと信じて居る者が多く、愛娘身賣の曉に涙一滴注がぬは、他國に於て見られぬ名古屋特有の奇觀であらう。又娘も自ら進むで藝娼妓になることを希望するのである。假令藝娼妓でなく普通良家の子女さへ、或は妾となり或は情夫をこしらへ、是等より得たる金錢を貯蓄して、嫁入準備の資に宛つるのが一般の風習である。名古屋が藝娼妓の輸出本場と云はるゝも無理ならぬ次第である。

紀伊和歌山の娘

和歌山は娼妓のない所から自然女子の風俗が惡い。中流以下は親が其娘をして心得ぬ眞似をさせるので、一人の娘に會日を定めて二三人も客を取らせるさうだ。何れも二十歳前後の娘で二三人連立ちて米澤の着物に、縮緬と黑繻子の晝夜帶をしどけなく締め、表附の黑塗下駄を故意と素足につつかけて往來するものがある。初めて見た者は娼妓かと思ふくらゐだ。

豐前行橋地方の娘

豐前國行橋地方では娘の事を『おぎん』と云ふ、十五六歳位な娘は大抵頭髮を、銀杏返しこの地方の所謂『しやッぽ』に結ふて、島田髷などは少しも流行ないが、近頃は子守女までが揚卷に結ふことが流行出した。髮の掛物は大概唐縮緬である。

一寸一二里の所へ行くにも、田舍の姐さんの赤湯卷の行列は今も昔も變ることはないが、近來はこの地方の農家の娘が、野良仕事に

從事すれば鍬を持ち鎌を持つから、指が太くなるとてこれを苦にするやうになつた。斯樣な流行の傾きあるは、淫賣婦の指の細きを羨むの結果で、それ等の爲めにや此地方の娘は年頃になれば、機織又は製絲場へ雇はるゝ者が多く、農業に從事せるものは十中の六であるさうだ。

當地方では奇體なことには娘の寺詣が多く見受けられる、今の若さにあの通りの御信心か、やれ〳〵御殊勝な事だと思へば事實は豈圖らんやで、何れの娘も精一杯に飾込むて寺の御堂へ座る。若い男の連中はそれと見るより續いて寺詣りをし、同く座りてから、佛よりも娘、其處邊に落ち散つたる賽錢を拾ては、娘へ投附るを雙方樂みとして居る。

又娘風俗は宛然酌婦のやうて見られたものではない。何の流行も酌婦が魁で、酌婦が如彼して居るからとて、町家の娘が直に之を眞

似る。肌着の襟を上と下とに並べ、胸下より帶際まで襟を露はし、その長さ八寸位もあらんか、斯うして澄して居るのが當今の娘風俗である。町家の娘の中の部ではこれよりも眞面目であるが、大坂越味は交つて居る。萬事應接振りはじやらつゝいて居て、往來で太聲に人を呼ぶ所などは兎ても娘とは思へない。

何處ても夫婦の年齢は、大概男は女より四つ五つ、十、十二三歳年上なるは左まで怪しまぬが、この地方殊に農家向では男二十歳になれば、女は必ず十九歳若くは十八歳を以てし、若し女が男より七つ八つも年下なるときは、如何なる良緣でも女の方で『年齢が違ひますから』とて拒絶する。要之女は年齢の三つ四つ以上違う夫を有つを恥として居る。大抵十八歳を嫁入期として、これに遲るゝを『賣殘り』として恥づる風がある。であるから男は二十歳前後に於て、嫁を娶らなければ、中々嫁を娶るに困難ださうだ。こんな風で夫婦

の年齢が一つか二つ違うので、左なきだに老け易き女は一二年の内には、忽ち亭主よりも五つ六つも老けて見ゆるから、他國の人が見ると、この地方の夫婦は女が年長の如くに思ふのも其筈である。

對馬の婦女

對馬婦女子の健氣なるは男子も及ばざるので、物事に當て少しも恐怖の色なく男子を助けて甲斐々々しく立働く。平常荷物を運搬する馱馬の轡を執る者は皆婦女て、歸途には馬背に跨り一鞭當て快走し來たるさまは、昔の女丈夫の俤も偲ばるゝと書立つるは大袈裟なれど、市に行きて魚賣の歸るさ歸途を急ぐ時などは、妙齡の處女五六打連立ち馬背に跨り快走し來たるのである。

本島の西南端に豆酘村と名くる一寒村がある。此村の婦女子は決して髪を結ふてもらふことはない、昔の投島田とでも云ふべき、髷

のところに幾重にも曲げて結び附けて皆手作りである、若い學校育ちの娘でも髪を結ふてもらふ事はないので、此村には女髪結は一人も居らぬ。いや要らぬのである。

因に本島の婦女の着物は筒袖で、上に腰切の紺飛白の袖無しを夏も着て居る、其に三巾をついて腰の周圍に少しあげた外、皆取卷く程の大きい三巾前垂を締めて決して帶は用ゐない。

攝津稗島の女

大阪市を去ること西方三十町許りに西成郡稗島と云ふ村がある。東は淀川の下流なる中津川を境とし、西は神崎川を以て村境とせる地形で、村内は豪家多く極貧の家は少なく、先づ富裕なる村であるが、不思議なことには此村の女子は、概ね容貌美なれども皆上目蓋の肉高く凸起して居る。それてこの村は他村と婚姻をなすことなく

皆同村の血脈と緣組をする。また女子は帶を占むることなく、三幅の前垂にて着物の上を締め、如何なる儀式盛裝を要するときと雖ども決して改めぬ。されど他村へ行く時は村境なる川を越えて後、始めて帶を占むるのである、若し此等村内の規約を犯したる者は、餅を搗きて村内一統へ配り其罪を謝するのである。

因に稗島は往昔は一の島で、官女の罪ある者を配流し姫嶋と稱へしを、後世稗島と訛稱したので、女子の締むる三幅の前垂は官女の穿ちし袴の變化せしものであるさうだ。

○肥後牛深の娘

「牛深や三度行きゃ三度裸か」とは熊本縣は恐か、其近縣で謠ふ文句である。この牛深とは肥後の宇土半島の南端なる、牛深港の事を云つたので、風景の絶佳と共に牛深の娘と云へば世間に知られて居る。この地方は娘五人持てば倉庫を建てるといふくらゐで、娘の子は非常に珍重がられるが、之に反して男の兒でも生れだら、放蕩者が出來たとて眉をひそめ厄介物視するのである。

其珍重がられる女の子は何をするかと云ふに、云ふまでもなく悉く娼妓にする。其娼妓といふものがちと異樣である。牛深の町を歩いて見れば、小間物屋や荒物屋などの二階には、貸席と云ふ看板がかゝつて居る、其數は實に十四五軒を下らない。娼妓は各々自家に居て晝寢の夢が覺めると湯に入り、夕飲をしまうと化粧に取りかゝる、それが終ると海岸とか町内とか皆思ひ〳〵に、獲物を見附くるために、ぶら付いて居る。日に燒たる赤銅色の面と光る眼で、なまめかしい女郎の風を見ては堪らぬと見え、日が暮れると若者等は例の貸席の二階で、氣に入りたる女郎を對手に巫山戲るのだ。其費用は通例一回内外で娼妓の手に入るのが五十錢、其餘は酒と肴と席料と